

富山県における国際理解教育に関する研究

－高校生のアンケート調査を中心に¹－

Study of International Education in Toyama Prefecture :
from view point of a Questionnaire Research in High School Students

佐藤悦夫
SATO Etsuo

1、はじめに

2006年度富山県高等教育財団の助成を受けて「国際理解教育のあり方に関する研究」(安達哲夫、佐藤悦夫、望月健一)が実施された。異文化理解・国際理解教育の重要性は今日ではだれでもが認識している。本稿では、富山県における高校生のアンケート調査をもとに、異文化理解・国際理解教育の現状を把握し、今後異文化理解・国際理解教育をどのように推進するかを検討した。

2、日本における国際理解教育の歴史

日本における国際理解教育の歴史は、ユネスコの国際理解のための教育に強い影響を受けている。以下、ユネスコの国際理解教育の流れならびに日本における国際理解教育の歴史についてまとめる。

佐藤郡衛によると、ユネスコの国際理解教育は次の4時期に区分されている(佐藤郡衛 2001)。第1期(1946年～1954年頃まで)は、第二次世界大戦の反省にたつて、世界規模の戦争を二度と起こさないための教育をそれぞれの国民国家の独自性を踏まえながら具体化していくための模索期である。第2期(1955年～1974年)は、植民地支配から独立した第三世界の振興国家の誕生とともに「東西文化価値の相互理解にそつて国際理解の教育を推進する」時期である。第3期(1974年～1980年代)は、国際連合の1974年の第18回総会で「国際理解、国際協力および国際平和のための教育、ならびに人権および基本的自由についての教育」という勧告が採択され、これがその後のユネスコの指針を方向づけた。この時期に南北問題や地球規模の環境問題が顕在化し、地球の一体化が強く意識され、国際理解教育、環境教育、軍縮教育などが新しく付け加えられた時期である。第4期(1990年以降)は「平和、人権、民主主義をキーワードとする新しい国際理解のための教育」が開始された時期である。

日本では、これらのユネスコの動きに連動して次のように国際理解教育が変化していった。1953年にユネスコ実験学校が世界15カ国33の中学校で始まったが、日本も6校がこれに参加した。1955年以降日本では、高度成長期に入り、また日本と世界との人的・物的交流も拡大するにつれて「他国理解」の対象が「開発途上国」

¹ 本稿は、安達哲夫、佐藤悦夫、望月健一 2007 『国際理解教育のあり方に関する研究』2006年度富山県高等教育振興財団私立大学振興事業(研究活性化)助成金報告書の2章を加筆修正した。

に向けられるようになった。これは開発途上国に、現在の人類の課題である貧困・飢餓からの脱却、資源問題、環境破壊の問題、人口問題等が集約されており、発展途上国に関する学習がその地域のみならず世界の理解につながるものと考え方である。「他国理解」に関するもう一方の傾向は、「異文化理解」という考え方であった。異文化理解とは、その国の政治、経済などの表面的な把握だけではなく、その国民・民族の持つ「基層文化」を理解することである。さらに「異文化理解」を進める基盤に「自文化理解」とそれによる文化理解の視点を持つことが要求された（佐藤照雄 1993）。

このように 1980 年代までの国際理解教育は、その底流に国民国家という枠組みを前提にし、国民国家同士の相互理解と利害の調整をはかるための国際協調・協力の必要性が示され「国際的な日本人」「国際社会で活躍する日本人」の育成を目標にして、かつ「ナショナルアイデンティティ」の形成を基本原理とするものであったといわれている（佐藤郡衛 2001）。

1980 年代になると日本の国際理解教育は、第一にユネスコの国際理解教育、第二に開発教育、環境教育などの新しい国際理解教育、そして第三に海外・帰国子女教育などの国際化に対応した教育の三つが混在する状況になった。そこでこのように多様化した国際理解教育を統合するものとして「グローバル教育」が提唱された（佐藤郡衛 2001、樋口 1995）。

魚住は、グローバル教育と国際理解教育との違いを強調する。すなわち、国際理解教育は、「主権国家の集合体としての国際社会を前提に、他国理解や異文化理解、国際関係理解等の学習を通じて、諸国民、諸国家間の平和、友好、協力の実現を目指す教育」（魚住 1995:46）であるのに対して、グローバル教育は「グローバル化する世界を前にしてグローバルな見方や意思決定、行動のできるグローバル公民の育成を目指す教育であり、国際理解教育とはその方向とするところが異なる」（魚住 1995:46）とする。さらに「多様性の理解につとめ、普遍性と独自性の視点から人間的価値の研究を進め、異質との共存をはかること」（魚住 1995:48）が今後ますます重要である。日本が多文化社会に移行するにつれ、「教育もその視点を異文化間理解教育から多文化共存教育へ転換をはかる必要に迫られている。そして多文化教育の研究・実践に乏しい日本では、グローバル教育がその役割を代替する」（魚住 1995:48-49）と述べている。

このように国民国家という枠組みを超えた普遍的な「地球市民」や「グローバル市民」の育成を課題としたグローバル教育であったが、常に「国民国家」対「地球市民社会」という二項対立の枠組みから脱却することはできなかった。このような状況の中で「多元的なアイデンティティ（アイデンティティを他者との関係性の中で動的に把握しようとする）の形成」を目指す国際理解教育が提唱されている。佐藤郡衛は、従来のグローバル意識から脱却し、ハイブリッドなディアスポラ意識の形成の重要性を述べている。ハイブリッドなディアスポラ²意識とは個人が国家という枠組みの中だけで生きているのではなく、時にはアジアの一員としてまた時には地球市民の一員として生きるというように、多元的でハイブリッドなアイデンティティを持つ人間像と捕らえている³。また、多元性を貫く原則として「共生」という概念が必要となる（佐藤郡衛 2001:33）。

共生という概念は次の3つの視点から定義されている（佐藤郡衛 2001:33-34）。

①自己との共生

共生の基本は、多様な学びの中で、自己を知ることからはじまり、自己と他者との関係を築いてゆ

2 : 佐藤はディアスポラの意味を「相互依存関係が国民国家を超えているようなあらゆる共同体をさす概念」として使用している（佐藤郡衛 2001:31-32）

3 : 「国境を越えてアジアをはじめ世界各地で活動している NGO などに従事している人に見られるように国家という枠組みを超えて市民レベル、自治体レベルでの交流、連携が生まれており、「地球市民」としての活動に取り組んでいる。また個人は生活者としてアジアや世界と直接結びついており、国家という枠組みだけに縛られているわけではない。個々人は、国家と同時に、アジアという地域、グローバル化した世界という生活圏域の拡大の中で多元的に生活をしており、国家も一つのアイデンティティの基盤にすぎない」（佐藤郡衛 2001:33）

くことである。自己への気付きは、個性を含めて自分の自分らしさ、あるがままの自分を受け入れることであり、それは自尊感情や自己肯定感へと結びつき、自己との共生が可能となる。多元的なアイデンティティの形成は、多様な自己を認め、それと向き合っていく必要があり、この意味でも自分との共生をベースに位置づける必要がある。

②他者との共生

他者との共生は、身近な生活レベルで異なった文化を持つ人々と交流してゆくことではじめて可能になる。共生とは、単に民族や国籍の違いだけでなく、様々な文化的背景や生活背景を異にする多様な人々と交流し、違いを認め合い、相互に理解を深めてゆくことである。

③環境との共生

他者との共生を通して、新しい生活環境を作り上げてゆくことである。他者との共生をポジティブにとらえ、有効に活用することにより独創的な文化の作り手、担い手になることができる。

以上、国際理解教育の流れを概観してきたが、「国際的な日本人」を育成するナショナル・アイデンティティを形成することを目的とした国際理解教育から、「地球市民」を育成するコスモポリテン的アイデンティティの形成する国際理解教育へ変化し、さらに現在では「確立された自己」が他者との交流を通して様々な場面でアイデンティティを変化させ、新たな文化や生活環境を作り出せるような多元的アイデンティティを形成させるような国際理解教育へと変化している。

3、富山県の高校生の国際理解に関する意識調査

(1) アンケート調査の概要

2007年1月から2月にかけて、富山県の県立高校、私立高校13校の協力を得て、1,864人の高校生を対象にアンケート調査を実施した。アンケートの主要調査項目は、①海外渡航経験（滞在、旅行）の有無、②旅行してみたい地域、③海外の高校生の学校生活へ興味、④外国労働者の賛否について、⑤国際結婚に関する抵抗感について、⑥今日の日本がすべきことについて、⑦日本人からみた外国人の日本人観、⑧身近に国際化を感じるとき、⑨これからの国際理解に必要なものは何かを主な項目として、その他の基本項目について質問した（詳細については、表1のアンケート調査用紙を参照）。収集したデータは、マイクロソフトのアクセスを使ってデータベース化し、さまざまな抽出条件を与えて検索できるようにした。

まず基本データを見てみる。サンプル1,864の内、国際系の学科あるいはコースの学生581人(31.2%)、その他の学生が1,283人(68.8%)である⁴。学年別では、1学年938人(50.3%)、2学年926人(49.7%)であり、男女別では男子665人(35.7%)、女子1,199人(64.3%)であった(表2)。これらの基本要素と主要調査項目を組み合わせて分析した(複数回答可もあるので、それぞれの項目のサンプル数は表2参照)。

(2) 海外渡航経験（滞在、旅行）について（アンケート、問2、問3）

海外滞在経験者は、149人(8.0%)であった。その理由としては(複数回答可、サンプル数155)、短期ホームステイ121人(78.1%)、保護者の仕事で20人(12.9%)と続く。その他が12人(7.7%)いるが、その大部分は生まれた国が外国であったことによる。滞在国では(複数回答可、サンプル数150)、アメリカが最も多く74人(49.3%)、オーストラリア18人(12.0%)、中国15人(10.0%)、イギリス10人(6.7%)であった。

⁴：国際交流学科等学科名に「国際」の付く学科名、コースの名の生徒を「国際系」のカテゴリーに分類した。1年生の段階でまだコースに分けられていない場合は、国際系のコースに分けられる2年生をこのカテゴリーに分類した。また、「その他」のカテゴリーには、普通科を含む「国際」の付かないすべての学科の生徒を入れた。

海外旅行経験者は、443人(23.8%)であり(表2)、訪問国では(複数回答可、サンプル数587)アメリカ208人(35.4%)で最も多く、中国137人(23.3%)、韓国60人(10.2%)、オーストラリア43人(7.3%)と続く。1993年の岡山県立総社南高等学校のアンケート調査をみると、海外渡航の経験がある学生は10%であった(岡山県立総社南高等学校 1993)。約15年間で海外渡航経験者は、10ポイント以上も増加しており海外に渡航しやすくなっている環境が窺える。これらの海外渡航経験者が高校の国際化や国際交流にどれほど影響を与えているのか以下分析してみたい。

(3) 旅行してみたい地域について(アンケート、問4)

高校生が海外旅行をすとして最も行ってみたい地域を見ると、西ヨーロッパが801人(43.0%)と最も多く、オセアニア398人(21.4%)、北アメリカ205人(11.0%)と続く(表2)。また、中央・南アメリカが108人(5.8%)と東南アジアやロシアよりも多い。1993年の岡山県立総社南高等学校のアンケート調査をみると、「海外旅行をしてみたい地域」では、西ヨーロッパ、オセアニアが全体の70%を占め、北アメリカは10%とその割合は小さい(岡山県立総社南高等学校 1993)。富山県の高校生も同様の傾向があり、海外滞在国や旅行の訪問国としてはアメリカが多いにもかかわらず、旅行してみたい地域としては北アメリカの割合が少ない。中央・南アメリカが比較的多いのは、近年マスコミで中央・南アメリカの記事やテレビ番組が多く取りあげられていることと関連があると考えられる。

男女別(図1-a)、学年別(図1-b)、学科・コース別(図1-c)、海外滞在別(図1-d)では大きな差は認められなかった。海外旅行経験別(図1-e)では、海外旅行経験のある生徒が6ポイントほど多く西ヨーロッパを志向していることが分かった。海外旅行経験者は、アメリカやアジア地域、オーストラリアをすでに経験している生徒であり、今後の旅行としては西ヨーロッパを希望しているのではないかと考えられる。

富山県は環日本海諸国と密接な関係にあるが、高校生の意識としては、必ずしも近い国に関心があるとは限らず、むしろ欧米圏に強い関心を持っているようである。

(4) 海外の高校生の学校生活へ興味について(アンケート、問5)

海外の高校生の学校生活への興味については、「授業内容と方法」が519人(27.8%)、「服装と校則」が482人(25.9%)、「部活動」が272人(14.6%)、「特に興味なし」が401人(21.5%)であった。「その他」と答えた生徒では、「放課後の過ごし方」、「日常生活」、「1日の過ごし方」等個別的な高校生活よりも、全体的な事を知りたいとの回答が多かった。1993年の岡山県立総社南高等学校のアンケート調査をみると、「服装と校則」が約30%、「授業内容と方法」が25%であり、また「特に興味なし」が20%弱、「部活動」が5%弱であった(岡山県立総社南高等学校 1993)。「部活動」を除き、ほぼ同じ傾向である。

男女別では大きな差があった(図2-a)。「部活動」では、男子が23.9%に対して、女子は9.4%、「特に興味なし」では男子が28.3%に対して女子は17.8%と差があった。逆に、「授業内容と方法」においては、女子が30.9%に対し男子は22.4%、「服装と校則」においては女子が31.4%に対し男子は15.8%であった。また、「受験勉強」や「男女交際」に関しては、男女ともほぼ同じ傾向であった。

学年別では、どの項目も差は大きくないが、1学年が「部活動」と「授業内容と方法」に、2学年が「服装と校則」に興味があるようである(図2-b)。学科・コース別では、「国際系」の生徒は、「部活動」に多く興味を示しているのに対して、「その他」の生徒は「特に興味なし」の割合が大きかった(図2-c)。海外滞在経験別では、滞在経験者は「授業内容と方法」の割合が大きく、滞在経験のない生徒は「特に興味なし」の割合が大きかった(図2-d)。また海外旅行経験別では、それぞれの項目において大きな差は無かった(図2-e)。

(5) 外国労働者の賛否について（アンケート、問6）

「外国人が日本で働くこと」に関しては、全体では1,626人(87.2%)が賛成で、215人(11.5%)が反対であった(表2)。賛成の理由としては、「国際交流や国際理解が深まる」が大部分でそのほか「日本人も海外で働いている」、「差別は良くない」等の回答が多かった。また、「労働力不足なので」等の経済的視点から賛成する人もいた。反対理由では、「犯罪が増える」、「日本人の働く場所がなくなる」、「マナーが悪くなる」等の回答が多かった。1993年の岡山県立総社南高等学校のアンケート調査では、「賛成」が約80%、理由としては「国際交流を深める」「日本人も外国で働いている」等、反対理由は「失業する」「日本の秩序が乱れる」であった(岡山県立総社南高等学校 1993)。1993年と比較して、賛成のポイントは増加しているが、賛成理由、反対理由はほとんど変わっていない。

男女別(図3-a)、学年別(図3-b)、学科・コース別(図3-c)、海外滞在経験別(図3-d)、海外旅行経験別(図3-e)においても、差はほとんど無かったが、男女別では女子の賛成者の割合が若干多かった。この傾向は、1993年の岡山県立総社南高等学校のアンケート調査でも同様である。

(6) 国際結婚に関する抵抗感について（アンケート、問7）

「外国人と結婚することに心理的抵抗があるか」については、全体集計では「抵抗あり」が808人(43.3%)、「抵抗なし」が1,045人(56.1%)であった(表2)。これは、1993年の岡山県立総社南高等学校のアンケート調査でもほぼ同じ割合が出ている(岡山県立総社南高等学校 1993)。

男女別では、男性の方が女性より抵抗が強い(図4-a)。これも岡山県立総社南高等学校のアンケート調査でも同様である。学年別(図4-b)、学科・コース別(図4-c)では、大きな差は見られなかった。海外滞在経験別(図4-d)では、滞在経験の方が抵抗が少なく、また海外旅行経験者別(図4-e)でも旅行経験の方が若干抵抗が少ないことが分かった。渡航経験があり、なんらかの形で外国人と交流を持った人の方が国際結婚においても心理的抵抗は少なくなるようである。

(7) 今日の日本がすべきことについて（アンケート、問8）

「今日の日本がすべきことは何か」については、選択肢として次の7個を選んだ(表1)。

回答①：アジアの先進国としてアジア地域の発展に尽くすべきである。

回答②：経済面で大国となったのであるからそれに見合った防衛力を整備すべきである。

回答③：国連活動の中心的存在となるべきである。

回答④：発展途上国への援助をもっと増やすべきである。

回答⑤：日本の現状をもっと諸外国に知らせるべきである。

回答⑥：国内問題に目を向け、社会福祉の充実に力を入れるべきである。

回答⑦：その他

全体集計では、回答⑥が733人(39.3%)で最も多く、次に回答④が318人(17.1%)、回答①が282人(15.1%)と続く(表2)。その他の回答としては、環境問題に関する回答が最も多かった。1993年の岡山県立総社南高等学校のアンケート調査では、「国内問題(福祉充実)」が約40%を占めている一方で、回答①、④の合計が36%を占め、内政外交面で日本の方向の一つを占めているとの結果であった(岡山県立総社南高等学校 1993)。今回の富山県での調査でもほぼ同じ傾向が出ている。

男女別では、男子が回答①、②、③に対して割合が大きかったのに対し、女子は回答④、⑥に対して割合が大きかった(図5-a)。学年別では大きな差は無かった(図5-b)。学科・コース別では、国際系が回答③、④に対してその割合が大きかったのに対し、その他は回答⑥を選択する人の割合が大きかった(図5-c)。海外滞在経験別では、経験者は回答⑤の割合が大きく、回答⑥に対する割合が小さかった(図5-d)。海外旅行経験別

では、大きな差はなかった (図 5-e)。

(8) 日本人からみた外国人の日本人観 (アンケート、問 9)

「日本が外国人の目にどのような国として映っているか」については、全体集計では、「金持ち・豊か・経済大国」が 875 人 (22.2%)、「まじめ・勤勉」が 577 人 (14.6%)、「働きすぎ」が 493 人 (12.5%) と続いている (表 2)。外国人が実際どのように考えているか、知りたいところである。

男女別では、大きな差は無いが、女子が「まじめ・勤勉」と回答した割合が大きかった (図 6-a)。学年別、学科・コース別においても大きな差はなかった (図 6-b、図 6-c)。海外滞在経験別でも、大きな差はないが、経験者が「礼儀正しい」と回答した割合が大きかった (図 6-d)。海外旅行経験別では、大きな差は無かった (図 6-e)。

(9) 身近に国際化を感じる時 (アンケート、問 10)

「身近に国際化を感じる時はどのようなときか」について、選択肢として次の 8 個を選んだ (表 1)。

回答①：インターネットを使って世界中の情報が入手できる時

回答②：近所に外国人が住んでいる時

回答③：ニュースで日本と関係ある国際問題が報道された時

回答④：留学生や ALT と外国語で話をした時

回答⑤：海外旅行をする日本人が身近にいる時

回答⑥：身近に帰国子女の友達がいる時

回答⑦：二カ国語放送や衛星放送を聴いている時

回答⑧：その他

全体集計では、回答①が 598 人 (32.1%)、回答④が 436 人 (23.4%)、回答③が 321 人 (17.2%)、回答②が 238 人 (12.8%) と続く (表 2)。「その他」の回答としては、「プロ野球選手がメジャーに挑戦するとき」、「相撲に外国人の力士がいること」、「日本の映画に外国人が出たり、外国の映画に日本人が出たりする」、「洋楽を聴く」などのスポーツ・芸能に関するものが多かった。

男女別では、男子が回答①、③に対する割合が多いのに対して、女子は回答②、④に対する割合が大きかった (図 7-a)。学年別では、大きな差は無いが、1 学年は回答②、③の割合が大きいのに対して、2 学年は、回答①、④に対する割合が大きかった (図 7-b)。学科・コース別では、国際系の生徒が回答④を選択した割合が非常に大きく (図 7-c)、また海外滞在経験別でも同じ傾向が認められた (図 7-d)。海外旅行経験別では、回答④に対する割合が大きいものの、学科・コース別ならびに海外滞在経験別を比較するとその割合は小さい (図 7-e)。

このアンケートからは、国際系の生徒や海外滞在経験者は、語学のスキルがあり、その結果回答④を選択し、また女子生徒の方が外国人と会話するのに抵抗感が少ないことが窺える。一方、会話が得意でない学生は、インターネットを使ったりニュースを聞いたりして国際化を身近に感じているようである。

(10) これからの国際理解に必要なもの (アンケート、問 11)

「これからの国際理解に必要なものは何か」について 3 個の選択肢を設けた (表 1)。

回答①：日本という国を前提にして、他国との協調、他国理解、異文化理解をはかること

回答②：日本という国にとらわれず「地球市民」の一人として、世界の人々が直面している環境問題、人口問題、南北問題などの地球規模の問題を理解しその解決策を考えること

回答③：その他

全体集計では、回答②が 1,067 人 (57.2%)、回答①が 728 人 (39.1%)、回答③が 42 人 (2.3%) であった (表 2)。「その他」では、「日本の文化をもっと知ること」や「両方必要である」等の回答があった。男女別 (図 8-a)、学年別 (図 8-b)、学科・コース別 (図 8-c)、海外滞在経験別 (図 8-d)、海外旅行経験別 (図 8-e) において大きな差は無かった。

(11) アンケート分析のまとめ

今回のアンケート調査において、アンケートの問 4、問 5、問 6、問 7、問 8、問 9 に関しては、1993 年に実施された岡山県立総社南高等学校のアンケート調査と比較検討するために同様の質問項目を設定した。その結果、各項目別分析で指摘したように、全体集計の結果は 14 年前の結果と多くの点で類似していた。富山県の高校生の国際理解に関する意識としては、地域的に特化しているということはなく、他県での傾向と変わらないといえる。

アンケートの問 10 に関しては、語学のスキル、外国人と会話するときの抵抗感によって大きく結果が変わるものと考えられる。インターネットが身近な存在となり、いつでも世界中の情報が入手可能な現在の社会であるが、人間対人間の対話を通して国際化を感じることも重要である。語学のスキルが向上すれば抵抗感も減少するし、抵抗感が減少すれば積極的に話す機会も増え語学のスキルも向上するので、さまざまな外国語を使用する機会を設けることが重要である。語学はあくまでもコミュニケーションの一つの手段であるので、英語が不得意な人には、英語以外の言語を学ぶ機会を設けることも必要であろう。

アンケートの問 11 は、1 章で言及した日本における「国際理解教育の歴史」を踏まえて質問を設定した。選択肢の違いを理解するのが難しかったかもしれないが、国境を越えた諸問題に対して今後取り組んで行く重要性を認識しているようである。

4、東京都立国際高校の国際理解教育の事例

(1) 東京都立国際高校の概要

都立国際高校は、都立唯一の国際学科専科の高校として 1989 年に創立された。国際高校は、東京都のみならず全国的にも、国際理解教育・語学教育のメッカとしての高い評価を受けている。国際高校の特徴として、様々な文化的背景を持つ生徒たちが学んでおり、この構成が国際高校を象徴している。教育の柱は、グローバルな視点に立つての人間理解と国際理解、そして高度な外国語能力の達成であり、直接体験を重視し、英語による夏季合宿、国際交流関係行事、海外修学旅行、文化祭・体育祭を中心とする各種学校行事、部活動が盛んな高校である。また、2003 年度～2005 年度のスーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール (SELHi) に指定された。

1 学年の入学定員は、一般生徒 160 名、帰国子女 40 名、在京外国人生徒 25 名、9 月入学者 15 名 (帰国子女または在京外国人生徒限定) の合計 240 名であり、定員の 3 分の 1 が帰国子女あるいは在京外国人生徒である (東京都立国際高校 2006)。

(2) カリキュラムの特徴

国際理解教育の指導原則として次の 7 点を挙げている (東京都立国際高校 2006)。

- ①すべての段階および形態の教育に国際的側面と世界的視点をもたせること。
- ②すべての民族、その文化、文明、価値及び生活様式 (国内の民族文化及び他国民の文化を含む) に対する理解の尊重。
- ③諸民族及び諸国民の間に世界的な相互依存関係が増大していることの認識。

④他国の人々と交信する能力

⑤権利を知るだけでなく、個人・社会集団及び国家にはそれぞれ相互に負うべき義務があることを知ること。

⑥国際的な連帯及び協力についての理解。

⑦各自が自分の属する社会、国家及び世界全体の諸問題の解決に参加する用意を持つこと。

これらの指導原則に基づき、カリキュラムが設定され授業が行われている。従来の高校にはないカリキュラムの特徴としては、ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、朝鮮語などの英語以外の外国語が学べること、国際理解科目の中の必修科目として、文化理解、社会理解、環境・表現、国際関係、環境科学、比較文化などがありさらに選択科目として日本文化、社会生活、コミュニケーション、伝統芸能、地域研究、映像、外国文学、福祉、演劇などの科目が設定されている。英語科目では、従来の読本、文法、作文というような区別ではなく総合英語、英語理解、英語表現などの必修科目の他英会話、英語表現、時事英語、留学基礎英語などの科目が選択必修として設定されている。

また、授業形態も授業科目により教室の大きさも変わり、語学の授業などでは従来の教室を半分に仕切ったゼミ室のような部屋で行っていた。

(3) 留学、イベント等の特徴

国際高校は、文化祭やスピーチコンテスト、夏季英語合宿等各種イベントにも積極的である。2006年度の桜陽祭(文化祭)は、2日間延べ4,000人弱の来場者があり、公演、飲食、展示等、どこのブースも力が入った内容であったようである。教員の話によると、土日も高校に来て文化祭の準備をする生徒もいるようであり、イベント内容も国際色豊かであった(東京都立国際高校ホームページ)。

また、2006年度には、2005年度に引き続きJ8(ジュニア・エイト)に参加した。J8というのは、先進主要8カ国サミット(G8)のジュニア版である。毎年、先進主要8カ国サミット会議が行われるのに伴い、それに先だって先進主要8カ国の若者がG8開催国に集い、交流を深め、環境問題、貧困問題など地球規模の諸課題を論じ合いコミュニケにまとめるというプログラムであり、2005年度から始まった(東京都立国際高校ホームページ)。

留学プログラムも豊富で、2006年度は韓国やオーストラリアに行っている。

(4) 東京都立国際高校のまとめ

都立国際高校は、国際学科専科の高校として、カリキュラムも国際理解教育に関する科目や語学教育に関する科目が充実している。また、カリキュラムのみならず、帰国子女や在京外国人の学生を受け入れることにより異文化や外国人との交流が「日常」であり、異文化との交流に対して抵抗感は少ない。さらに各種イベントを通してその交わりがさらに深くなり、また言語スキルや異文化や環境問題などの勉強内容の発表の場として国際的な場が設定されており、高校で学んだことが社会で通用することを実感できるプログラムになっている。

問題点としては、大学のカリキュラムのような豊富な選択科目が設定されているが、受験勉強を重視しようとする受験に有利な英語の選択科目に生徒が集中するということが指摘された。国際理解教育を重視するならば、英語のみならず英語以外の言語、言語の背景にある文化や社会を学ぶことが要求されるが、それらがいわゆる大学受験に直接つながらないところに課題があるようである。しかし、この問題もあまり大きな問題ではない。様々な入試形態が導入されている今日、いわゆるペーパーテスト以外で生徒を評価する入試制度が多くある。個性豊かな教育プログラムのもとで育った学生が、その個性を失うことなく、次のステップに進むことができるように大学側では検討する必要がある。

5、今後の課題

アンケートの結果ならびに東京都立国際高校の実践を通して、富山でできる国際理解教育のあり方に関して検討してみたい。

(1) 国際理解教育における高大連携プログラム

(i) 高校における国際理解系科目の設定とその開発

従来の高大連携プログラムは、講演会、大学の授業の紹介のような単発の企画が多かったが、毎週1回授業として指導できるようなプログラムを高校教員と協力しながら企画したい。国際系の学科やコースあるいは総合学科のような学科では総合的学習の時間に国際理解講座の導入が可能ではなかろうか。

佐藤は国際理解教育の取り組みを次のように述べている（佐藤郡衛 2001：45-46）。

国際理解教育の実践は、これまで2つのアプローチにより取り組まれてきた。一つは、環境問題、南北問題などの国際社会の現実を教材化し、それ自体の学習を目標にした「目的」としての国際理解教育の側面である。そしてもう一つは、これからの国際社会で必要とされるコミュニケーション能力、表現力、共感性などの個人の資質の育成をめざす「手段」としての国際理解教育の側面である。これまでは前者が重視され、教科・領域を中心にして知識修得型の学習が国際理解教育の中心に据えられてきた。だが、その教育を通して何を指すかという視点が背後に退いてしまい、技術主義に陥り、形骸化するという問題を抱えてきた。この両者を統合することが必要であり、そのためにも学校教育全体の取り組みとして位置づけていく必要がある。

大学の教員、留学生など高校教員が連携し「短期集中型プログラム」、「学期を通したプログラム」、「年間を通したプログラム」の開発が可能である。また、「我々にとっての国際理解とは何か？」というような身近な視点から取り組み、実際フィールドワークを行ったり、ボランティア活動を行ったりすることも可能である。

研究（学習）成果の発表の場を設定することも重要である。高校生、大学生、留学生、教員等が参加し、シンポジウムを開催したり、研究会を開催したりしながら「学んだことを発表する」場を設けたい。

(ii) 第二外国語プログラムの導入

富山県内では、中国語、ロシア語を高校における第二外国語として取り入れている高校もあるが、フランス語、スペイン語なども学ぶ機会を設ける必要があるだろう。特に、発展途上国を学ぶ上ではフランス語やスペイン語の役割は大きいと考えられる。また、英語が不得意な学生でも英語以外の言語は、得意な可能性もあるのなるべく多くの言語を学べる機会を設けるべきである。特に日本人にとって発音が簡単なスペイン語の導入の可能性はあるのではないだろうか。

(iii) 高校等のイベントへの参加

高校の文化祭や地域の国際交流イベントに積極的に参加することも可能である。高校生大学生両者にとって、学校やキャンパスを出て各種のイベントに参加することにより、実践の場での企画力、表現力、コミュニケーション力が養われるので、高校、大学、地域が一体となったイベントを企画する必要があるのではなかろうか。大学が企画するコンテスト等では、大学はあくまでも評価する立場として参加しているが、評価だけでなく、大学の教員による具体的な指導体制が求められる。

(2) 地域の国際化への貢献

現在は、佐藤の言う「国際的な話題を学習すること」を目的とする講演会や生涯学習プログラムが実施されている。それらと同時に、「手段」としての国際理解教育を地域に根付かせるためには、何が必要であろうか。

例えば、国際協力現場への体験ツアーや異文化理解のための海外フィールドワーク等のプログラムを大学が中心になり積極的に開発することが求められよう。また、日本人学校の教員として働いていた小学校、中学校、高校の教員、NGO 等で働いていた人たちのネットワークを作り国際情勢に関するデータベース作ったり、研究会を設けたりすることも重要であろう。最後に富山県在住の外国人との交流を促進したり、彼（彼女）等のためのボランティア活動をしたり、外国人と接触することが「日常」であり、彼（彼女）等との交流を通して新たな外国人と共生できる社会を作ることが重要である。

謝辞

本稿は、2006 年度富山県高等教育財団の助成「国際理解教育のあり方に関する研究」（安達哲夫、佐藤悦夫、望月健一）の研究成果の一部をまとめたものです。また、本研究を進めるにあたり多くの方々にお世話になりました。特に、聞き取り調査にご協力をいただいた東京都立国際高校、アンケート調査にご協力をいただいた富山県立富山いずみ高等学校、富山県立上市高等学校、富山県立呉羽高等学校、富山県立高岡商業高等学校、富山県立桜井高等学校、富山県立新湊高等学校、富山県立富山西高等学校、富山県立富山南高等学校、富山国際大学付属高等学校、富山県立富山商業高等学校、富山県立伏木高等学校、富山県立福岡高等学校、富山県立南砺総合福光高等学校の教員ならびに生徒の方々に感謝申し上げます。

8、あなたは今日の日本がまず、すべきことは何だと思いますか（一つ選択）。

- ①アジアの先進国としてアジア地域の発展に尽くすべきである。
- ②経済面で大国となったのであるからそれに見合った防衛力を整備するべきである。
- ③国連活動の中心的存在となるべきである。
- ④発展途上国への援助をもっと増やすべきである。
- ⑤日本の現状をもっと諸外国に知らせるべきである。
- ⑥国内問題に目を向け、社会福祉の充実に力を入れるべきである。
- ⑦その他 []

9、あなたは日本が外国人の目にどのような国として映っていると思いますか（複数選択可）。

- ①金持ち・豊か・経済大国 ②自分勝手・わがまま ③けち
- ④働きすぎ ⑤まじめ・勤勉 ⑥世界からどちらかという反感をもたれている。
- ⑦世界からどちらかという好感をもたれている。 ⑧狭い小国 ⑨政治が悪い
- ⑩礼儀正しい ⑪その他 []

10、身近に国際化を感じる時はどのようなときですか（一つ選択）。

- ①インターネットを使って世界中の情報が入手できるとき
- ②近所に外国人が住んでいるとき
- ③ニュースで日本と関係ある国際問題が報道されたとき
- ④留学生やALTと外国語で話をしたとき
- ⑤海外旅行をする日本人が身近にいるとき
- ⑥身近に帰国子女の友達がいるとき
- ⑦二ヶ国語放送や衛星放送を聴いているとき
- ⑧その他 []

11、これからの国際理解に必要なものは何だと思いますか（一つ選択）。

- ①日本という国を前提にして、他国との協調、他国理解、異文化理解をはかること
- ②日本という国にとらわれず「地球市民」の一人として、世界の人々が直面している環境問題、人口問題、南北問題などの地球規模の問題を理解しその解決策を考えること
- ③その他 []

ご協力ありがとうございました

註

(1) 本アンケートは、比較検討のために岡山県立総社南高等学校のアンケート調査（岡山県立総社南高等学校 1993 「国際理解についてのアンケート」『国際理解教育体系：学校・地域社会などでの多様な活動』第10巻）を一部参考にした。

表 2 : アンケート集計結果

質問	回答	人	%	合計 (人)
問 1 - (2)	国際系	581	31.2%	1864
	その他	1283	68.8%	
問 1 - (3)	1 学年	938	50.3%	1864
	2 学年	926	49.7%	
問 1 - (4)	男子	665	35.7%	1864
	女子	1199	64.3%	
問 2	ある	149	8.0%	1864
	無い	1695	90.9%	
	無回答	20	1.1%	
問 2-1 ⁽¹⁾	保護者の仕事	20	12.9%	155
	ホームステイ (短期)	121	78.1%	
	長期留学	0	0.0%	
	その他	12	7.7%	
	無回答	2	1.3%	
問 3	ある	443	23.8%	1864
	無い	1380	74.0%	
	無回答	41	2.2%	
問 4	東アジア (中国、韓国、香港など)	134	7.2%	1864
	西アジア (中近東)	8	0.4%	
	東南アジア (タイ、シンガポールなど)	48	2.6%	
	南アジア (インド、スリランカなど)	6	0.3%	
	ロシア・東ヨーロッパ	84	4.5%	
	西ヨーロッパ	801	43.0%	
	北アメリカ	205	11.0%	
	中央・南アメリカ	108	5.8%	
	オセアニア (オーストラリア、ニュージーランドなど)	398	21.4%	
	アフリカ	22	1.2%	
無回答	50	2.7%		
問 5	受験勉強	59	3.2%	1864
	部活動	272	14.6%	
	授業内容と方法	519	27.8%	
	服装と校則	482	25.9%	
	男女交際	73	3.9%	
	特に興味なし	401	21.5%	
	その他	45	2.4%	
	無回答	13	0.7%	
問 6	賛成	1626	87.2%	1864
	反対	215	11.5%	
	無回答	23	1.2%	
問 7	ある	808	43.3%	1864
	無い	1045	56.1%	
	無回答	11	0.6%	
問 8	アジアの先進国としてアジア地域の発展に尽くすべきである。	282	15.1%	1864
	経済面で大国となったのであるからそれに合った防衛力を整備するべきである。	103	5.5%	
	国連活動の中心的存在となるべきである。	128	6.9%	
	発展途上国への援助をもっと増やすべきである。	318	17.1%	
	日本の現状をもっと諸外国に知らせるべきである。	138	7.4%	
	国内問題に目を向け、社会福祉の充実にか力を入れるべきである。	733	39.3%	
	その他	130	7.0%	
無回答	32	1.7%		
問 9 ⁽¹⁾	金持ち・豊か・経済大国	875	22.2%	3940
	自分勝手・わがまま	280	7.1%	
	けち	153	3.9%	
	働きすぎ	493	12.5%	
	まじめ・勤勉	577	14.6%	
	世界からどちらかという反感をもたれている。	334	8.5%	
	世界からどちらかという好感をもたれている。	210	5.3%	
	狭い小国	396	10.1%	
	政治が悪い	195	4.9%	
	礼儀正しい	313	7.9%	
	その他	99	2.5%	
	無回答	15	0.4%	
	問 10	インターネットを使って世界中の情報が入手できるとき	598	
近所に外国人が住んでいるとき		238	12.8%	
ニュースで日本と関係ある国際問題が報道されたとき		321	17.2%	
留学生やALTと外国語で話をしたとき		436	23.4%	
海外旅行をする日本人が身近にいるとき		83	4.5%	
身近に帰国子女の友達がいるとき		48	2.6%	
ニヶ国語放送や衛星放送を聴いているとき		65	3.5%	
その他		53	2.8%	
無回答		22	1.2%	
問 11	日本という国を前提にして、他国との協調、他国理解、異文化理解をはかること	728	39.1%	1864
	日本という国にとらわれず「地球市民」の一人として、世界の人々が直面している環境問題、人口問題、南北問題などの地球規模の問題を理解しその解決策を考えること	1067	57.2%	
	その他	42	2.3%	
	無回答	27	1.4%	

註(1):複数回答可

図1-a : 男女別「問4、あなたが海外旅行をするとして、最も行ってみたい地域はどこですか」

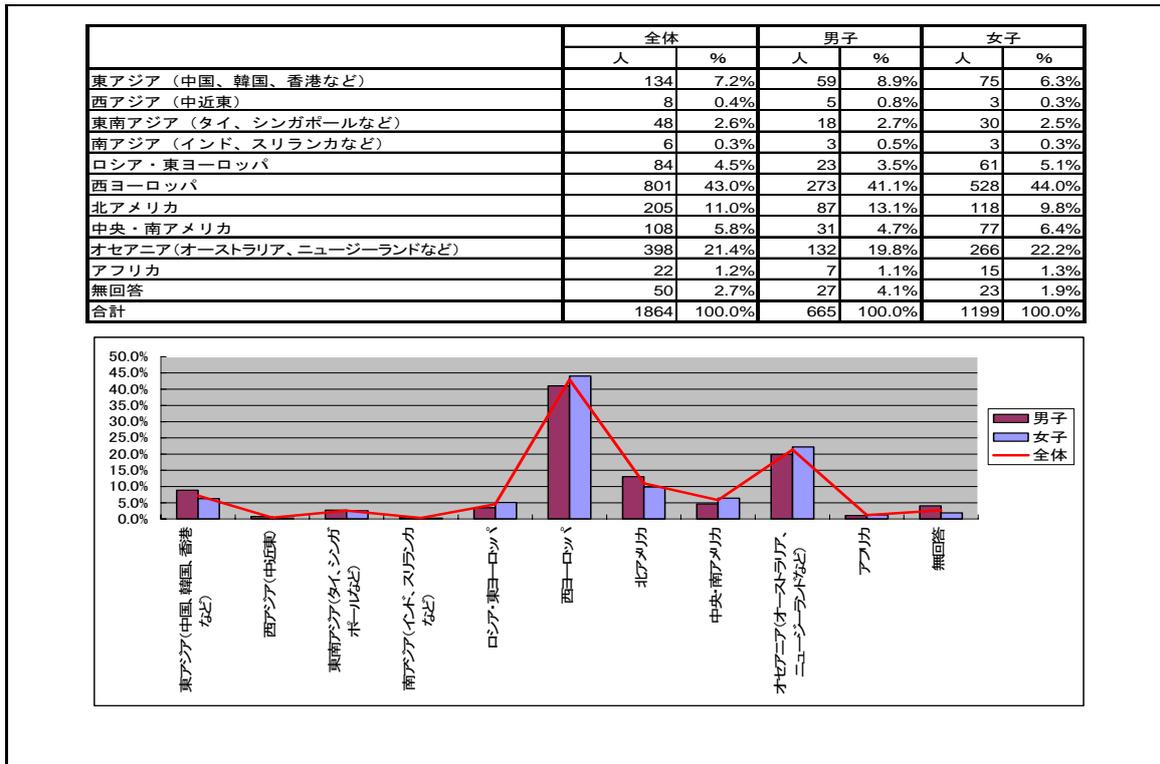


図1-b: 学年別「問4 あなたが海外旅行をするとして、最も行ってみたい地域はどこですか」

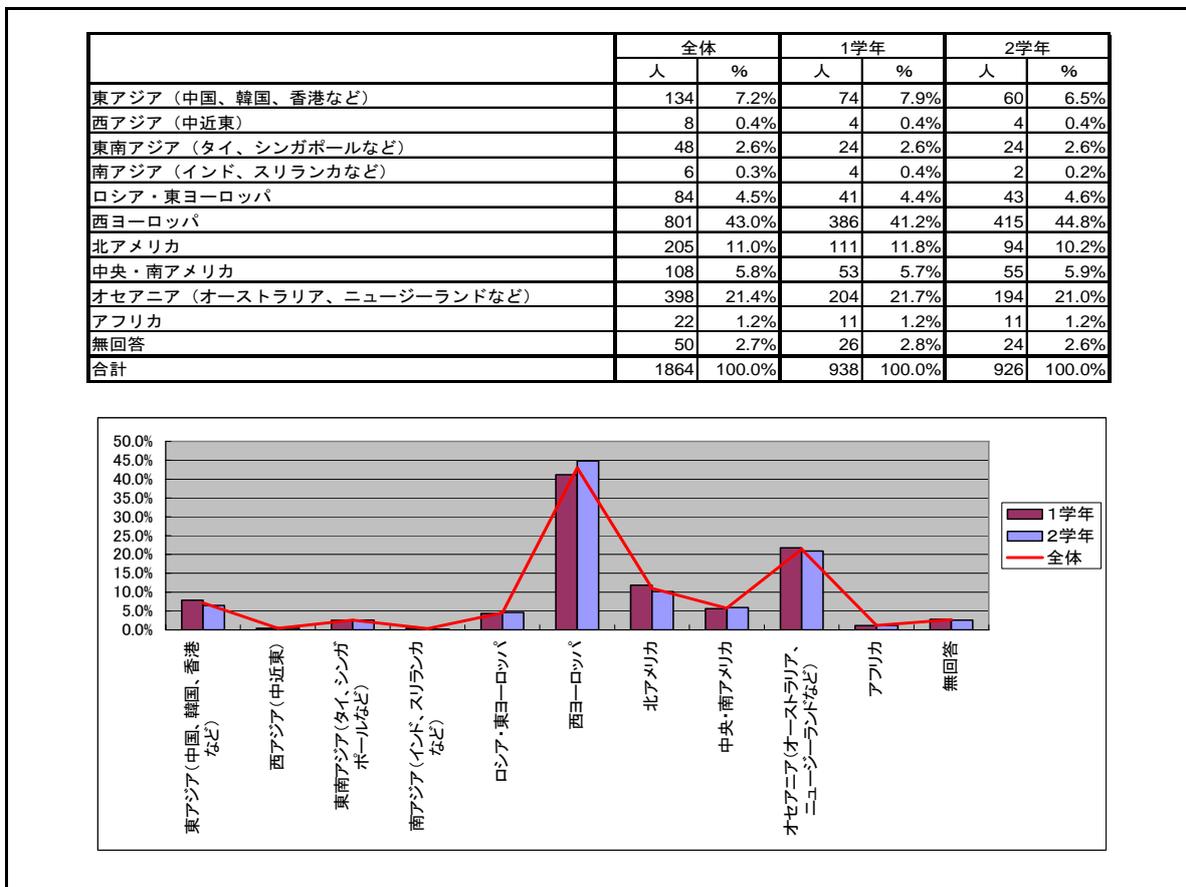


図1-c: 学科・コース別「問4、あなたが海外旅行をすることで、最も行ってみたい地域はどこですか」

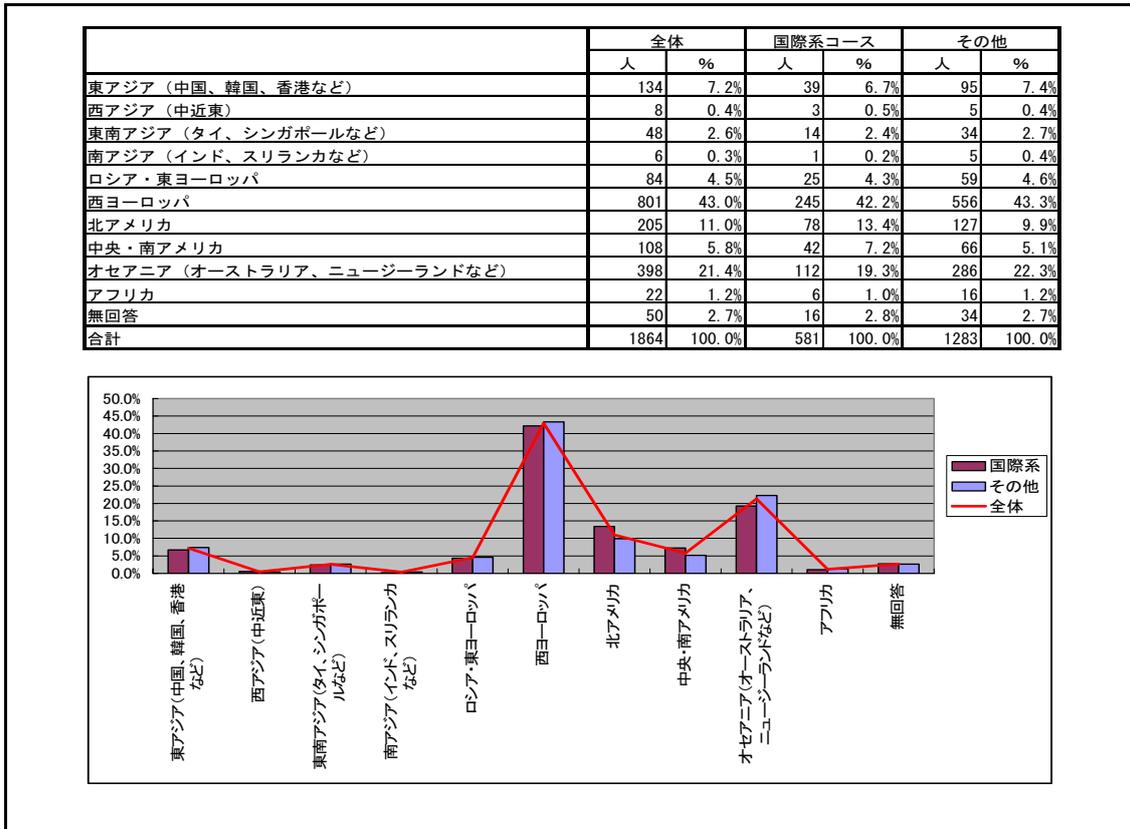


図1-d: 海外滞在経験別「問4、あなたが海外旅行をすることで、最も行ってみたい地域はどこですか」

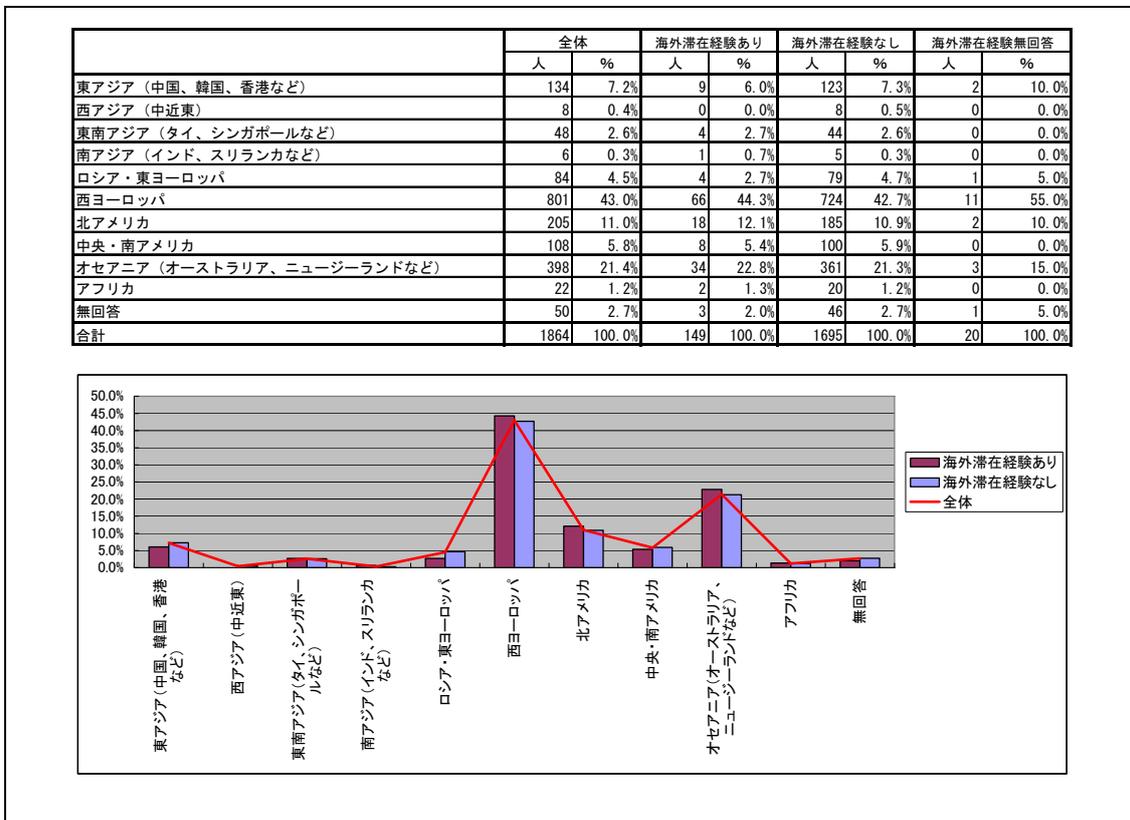


図 1-e: 海外旅行経験別「問4、あなたが海外旅行をすることで、最も行ってみたい地域はどこですか」

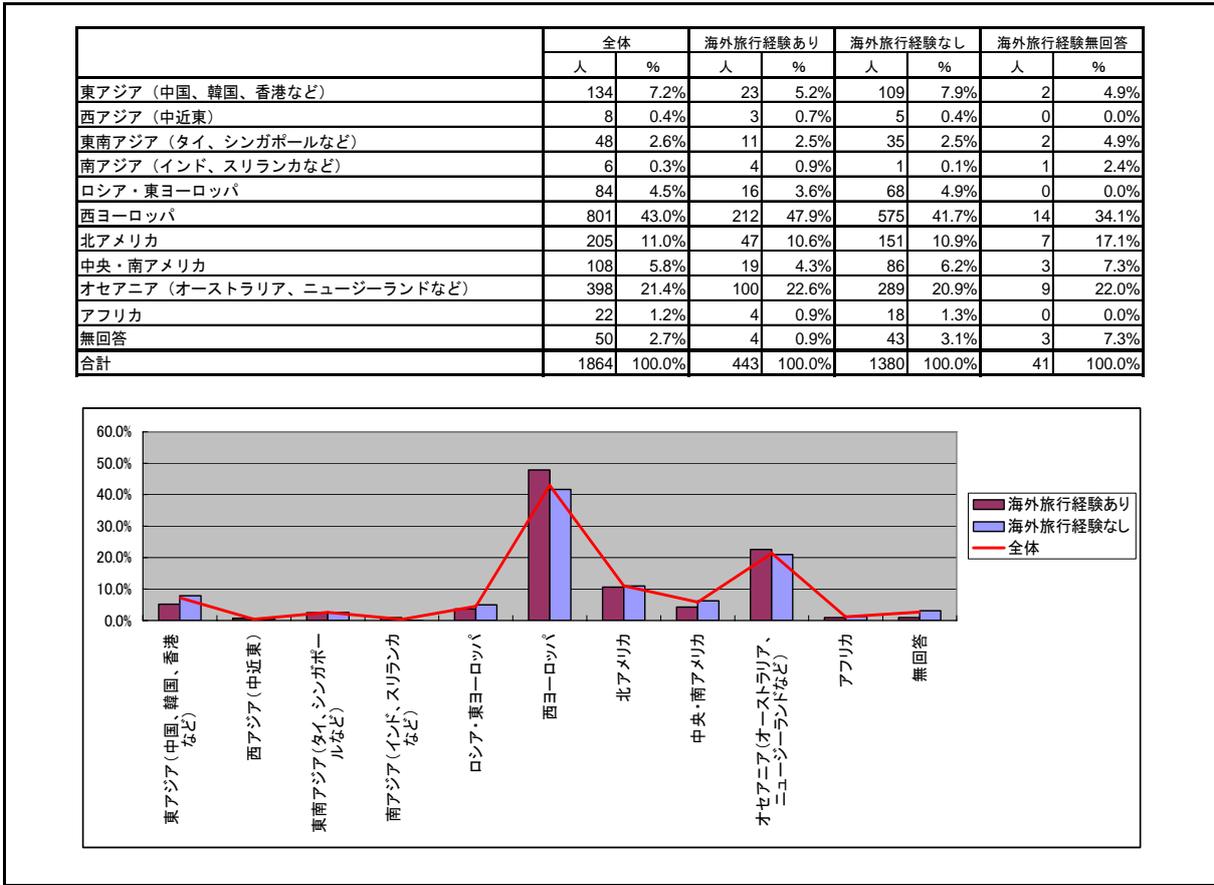


図2-a: 男女別「問5、あなたは高校生として、海外の高校生の学校生活のどの点に特に興味がありますか」

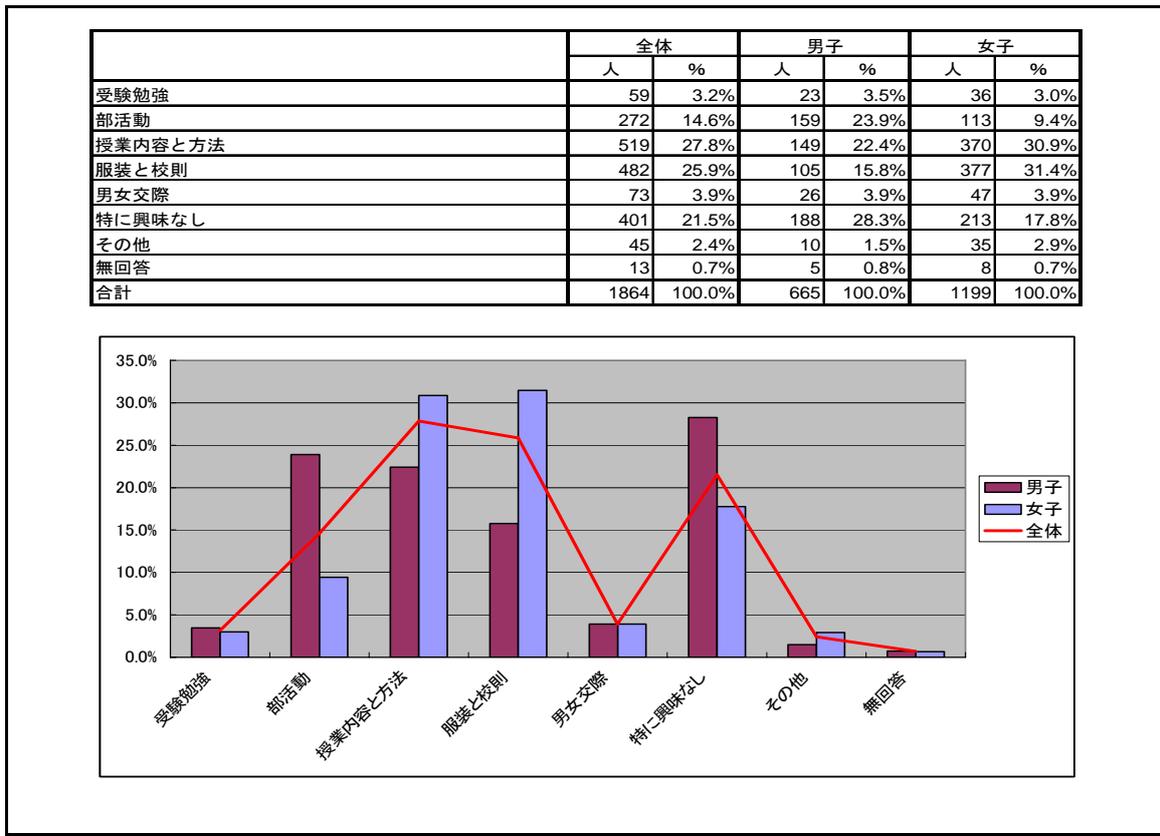


図2-b: 学年別「問5、あなたは高校生として、海外の高校生の学校生活のどの点に特に興味がありますか」

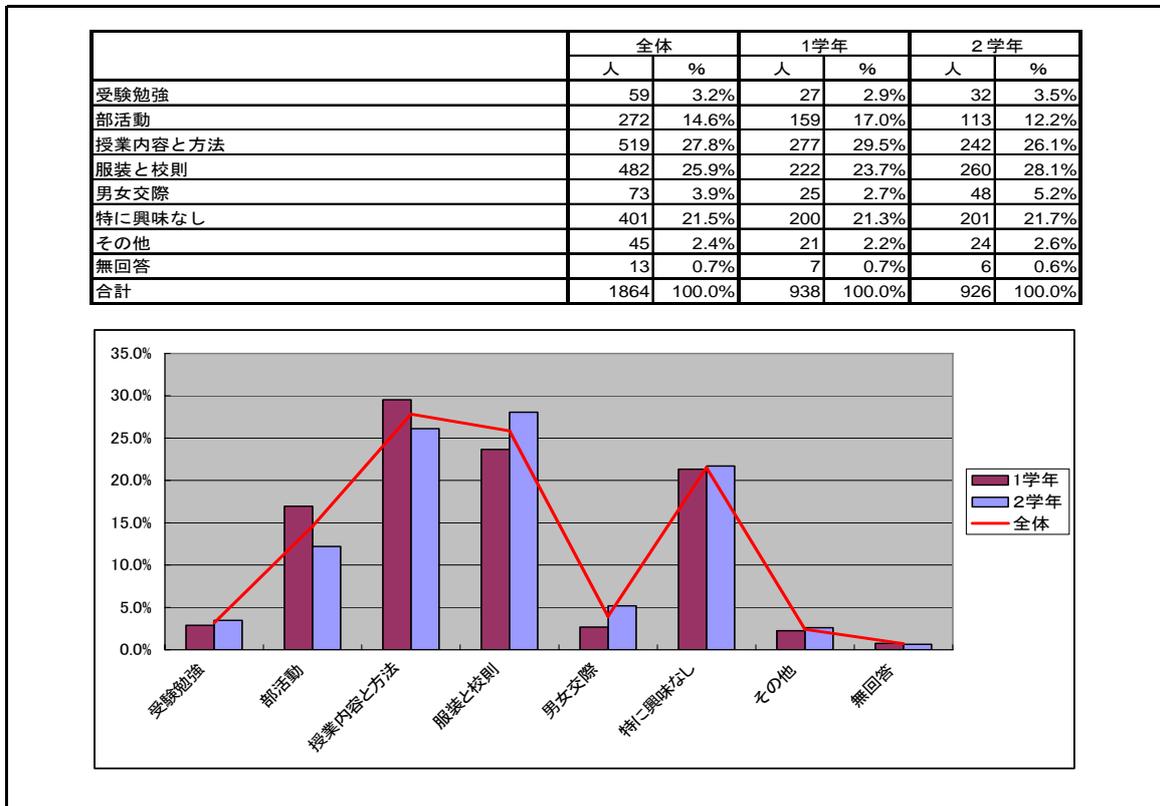


図2-c: 学科・コース別「問5、あなたは高校生として、海外の高校生の学校生活のどの点に特に興味がありますか」

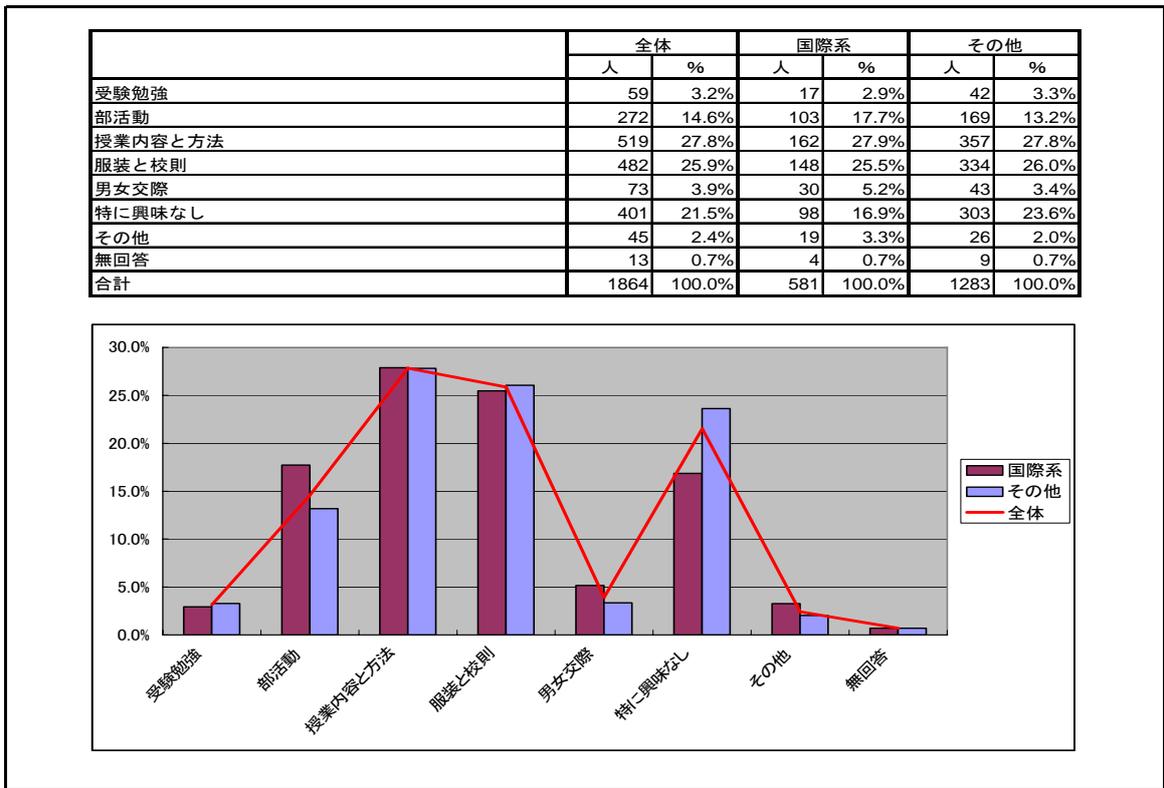


図2-d: 海外滞在経験別「問5、あなたは高校生として、海外の高校生の学校生活のどの点に特に興味がありますか」

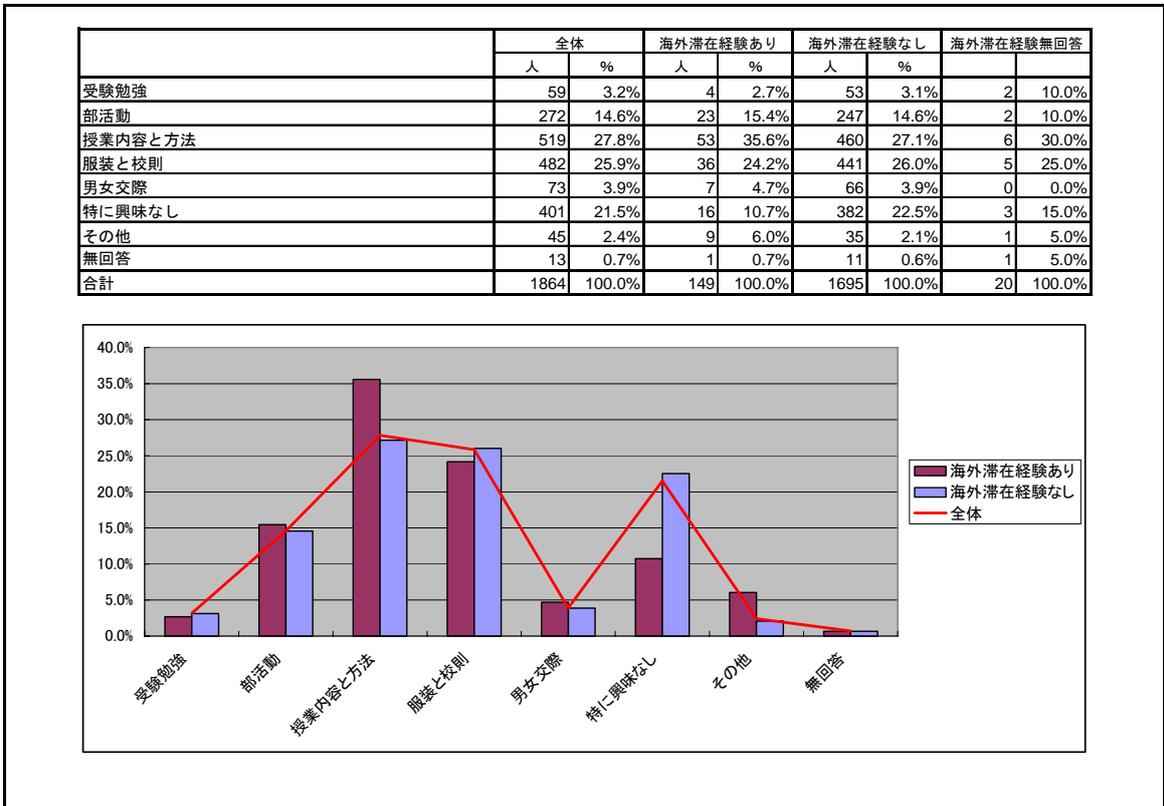


図2-e: 海外旅行経験別「問5、あなたは高校生として、海外の高校生の学校生活のどの点に特に興味がありますか」

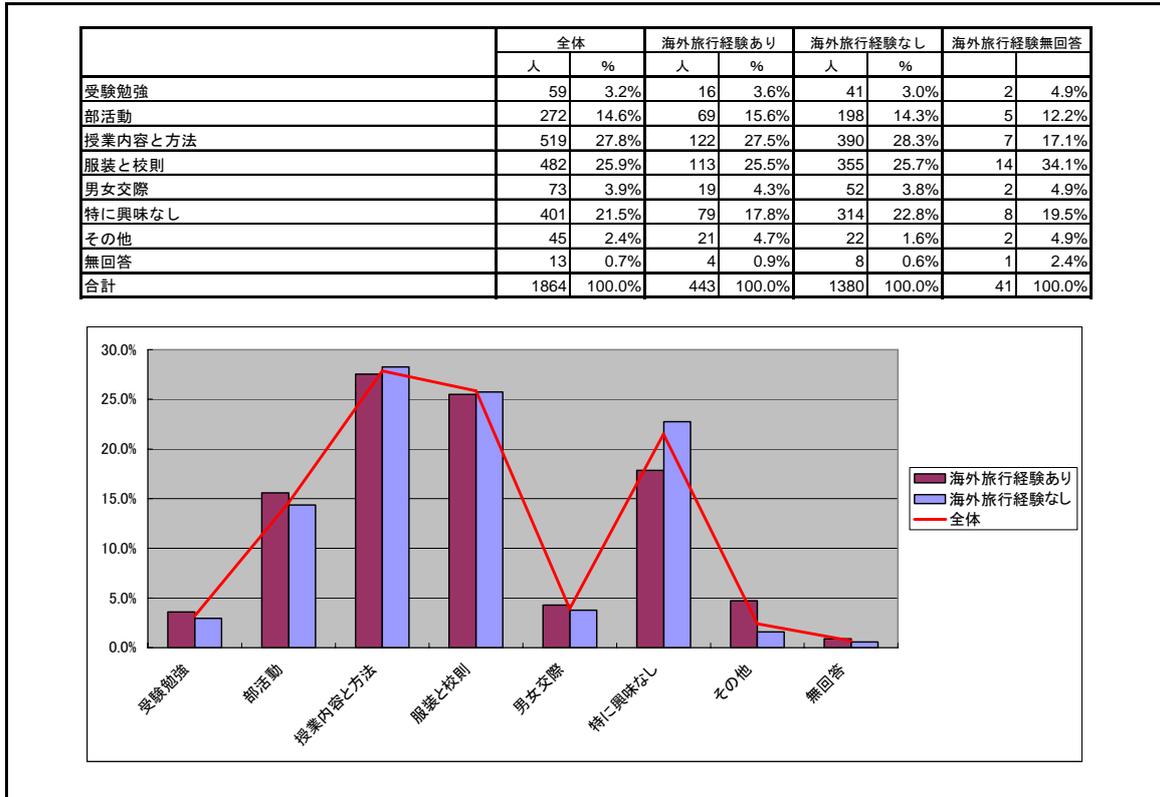


図3-a: 男女別「問6、外国の人が日本に多く来ていますが、あなたは外国人が日本で働くことに賛成ですか」

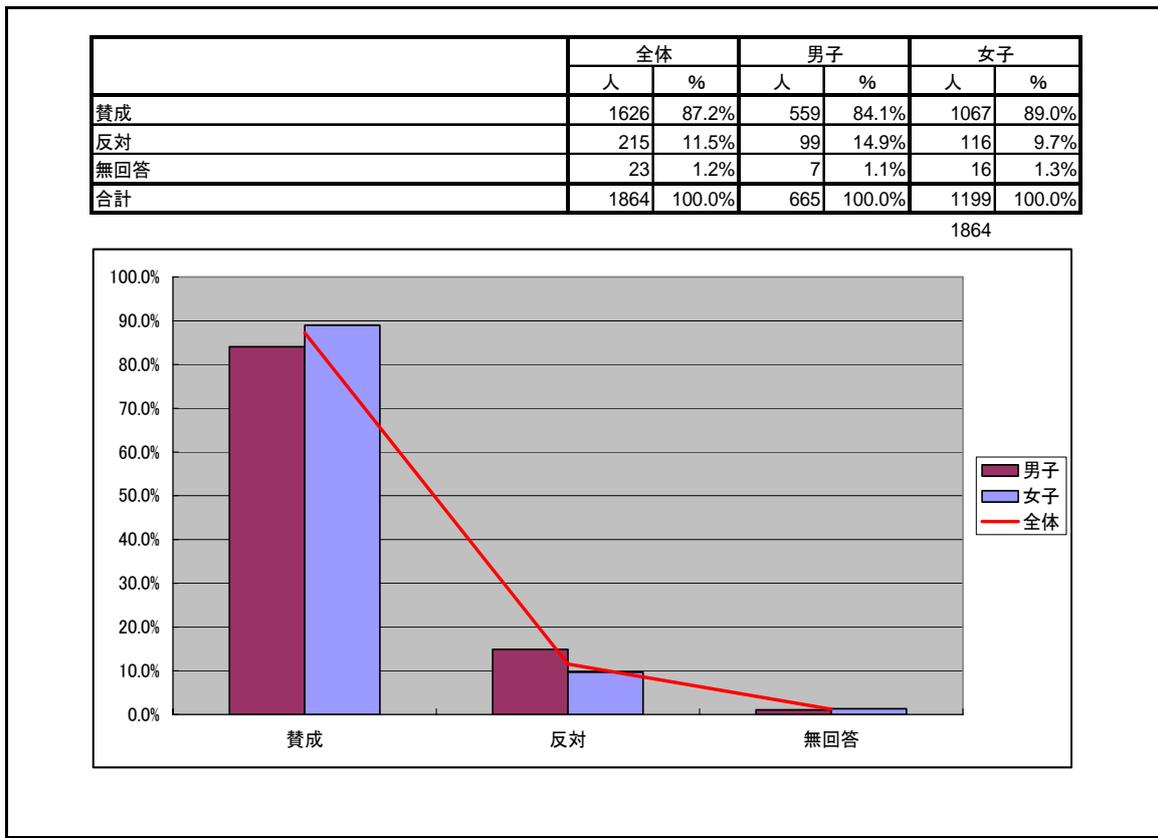


図3-b: 学年別「問6、外国の人が日本に多く来ていますが、あなたは外国人が日本で働くことに賛成ですか」

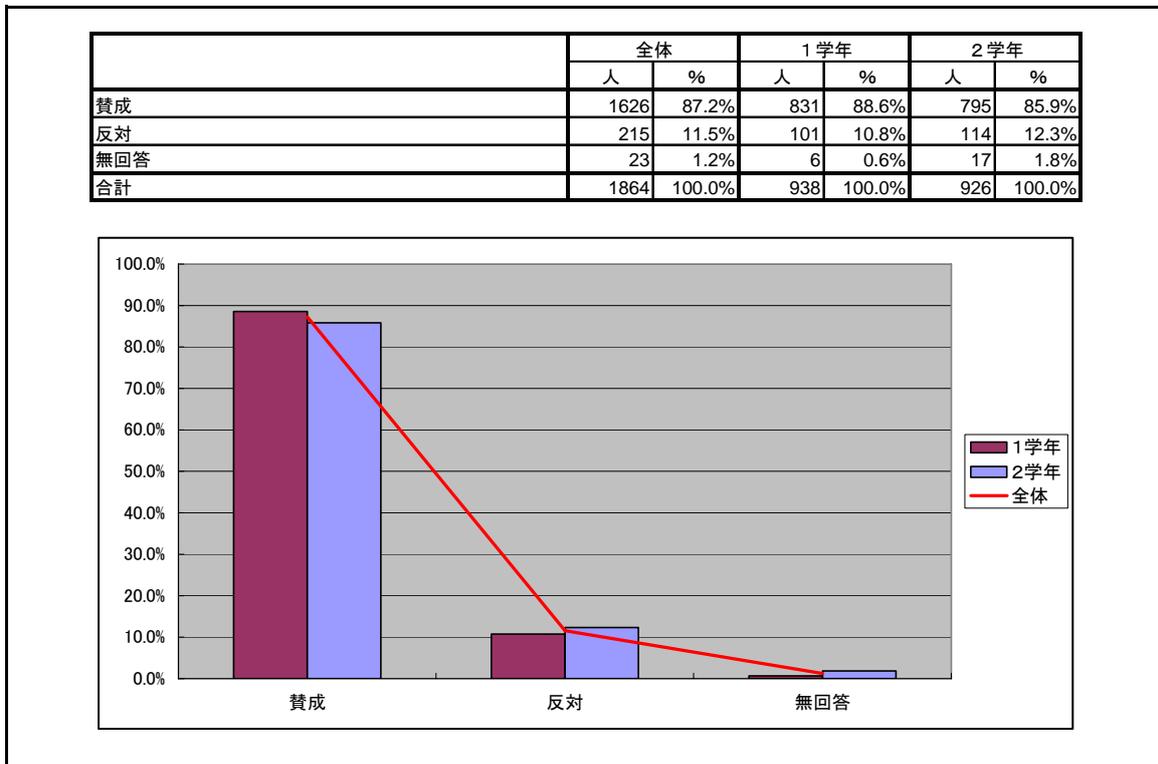


図3-c: 学科・コース別「問6、外国の人が日本に多く来ていますが、あなたは外国人が日本で働くことに賛成ですか」



図3-d: 海外滞在経験別「問6、外国の人が日本に多く来ていますが、あなたは外国人が日本で働くことに賛成ですか」

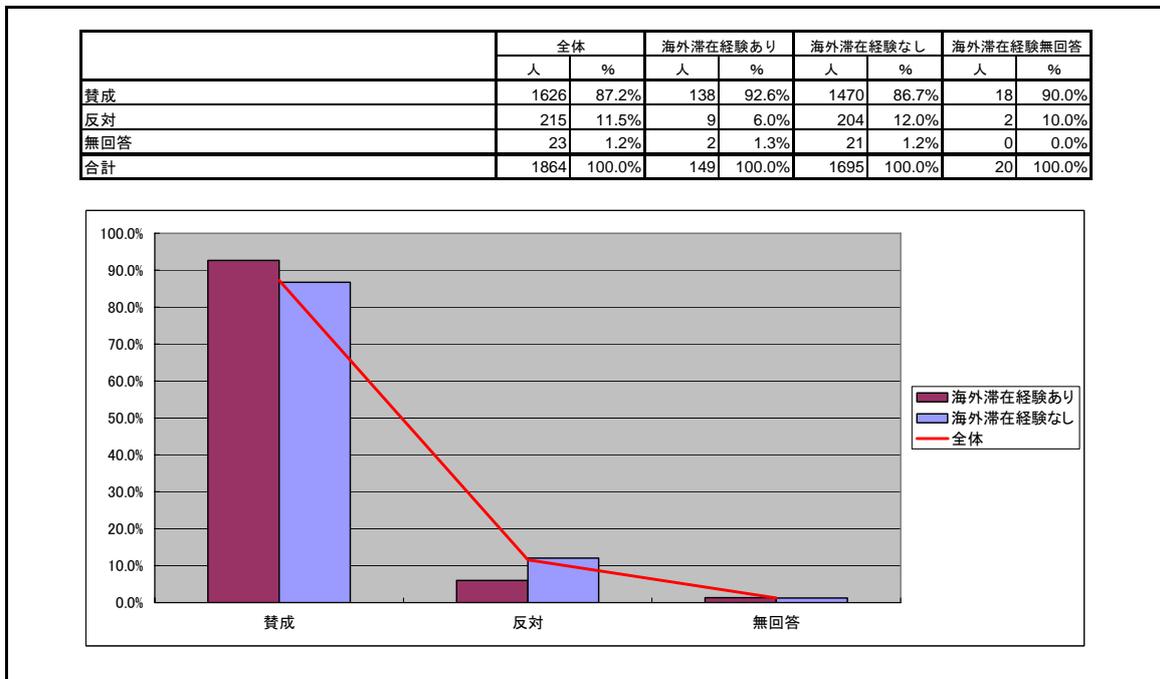


図3-e: 海外旅行経験別「問6、外国の人が日本に多く来ていますが、あなたは外国人が日本で働くことに賛成ですか」

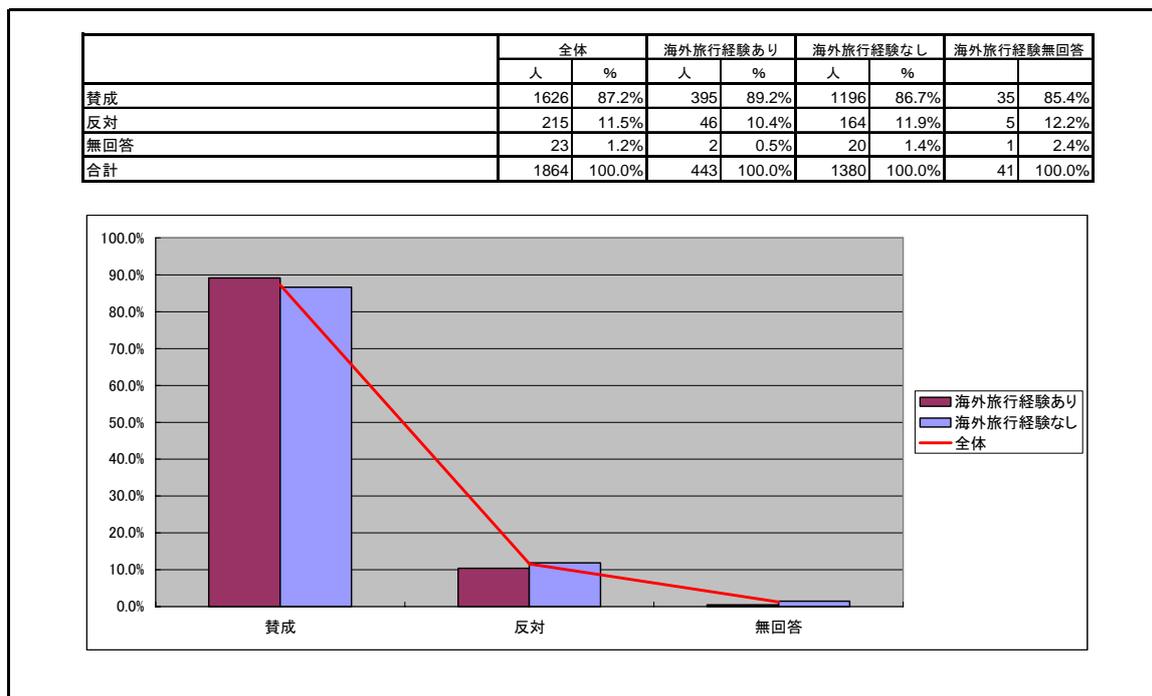


図4-a: 男女別「問7、あなたは外国人と結婚することに心理的な抵抗がありますか」

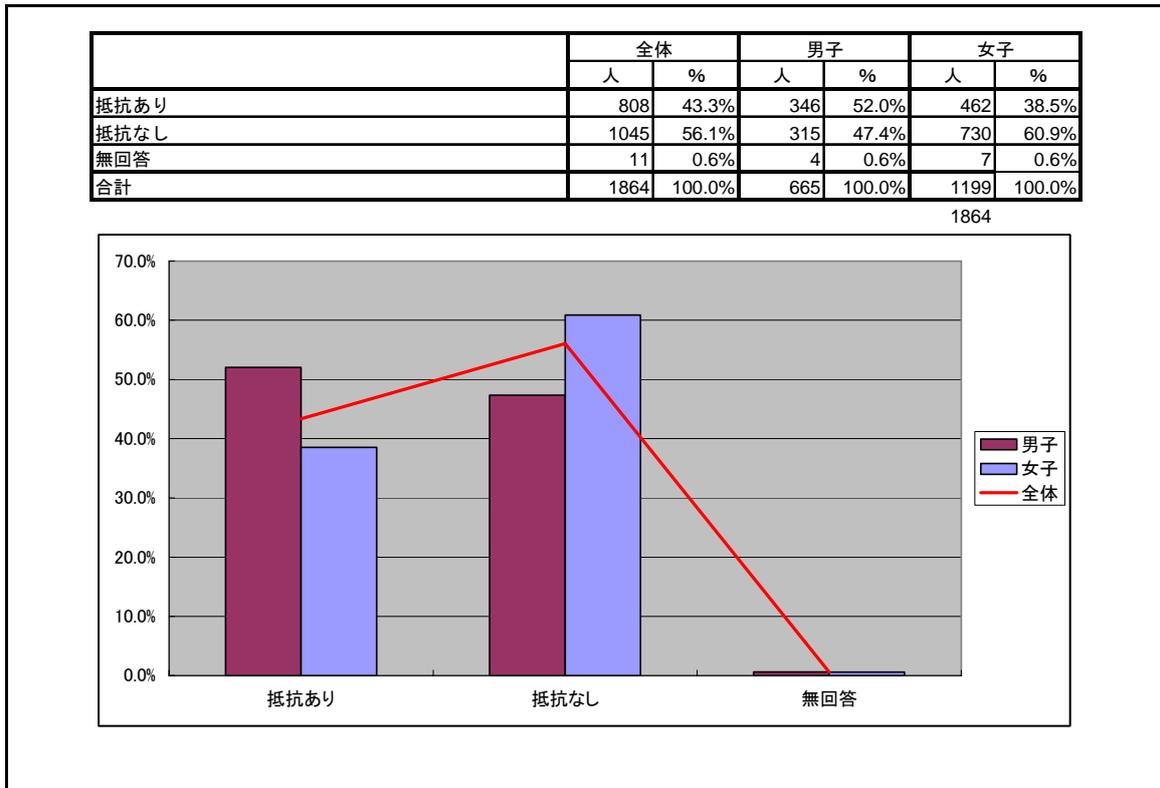


図4-b: 学年別「問7、あなたは外国人と結婚することに心理的な抵抗がありますか」

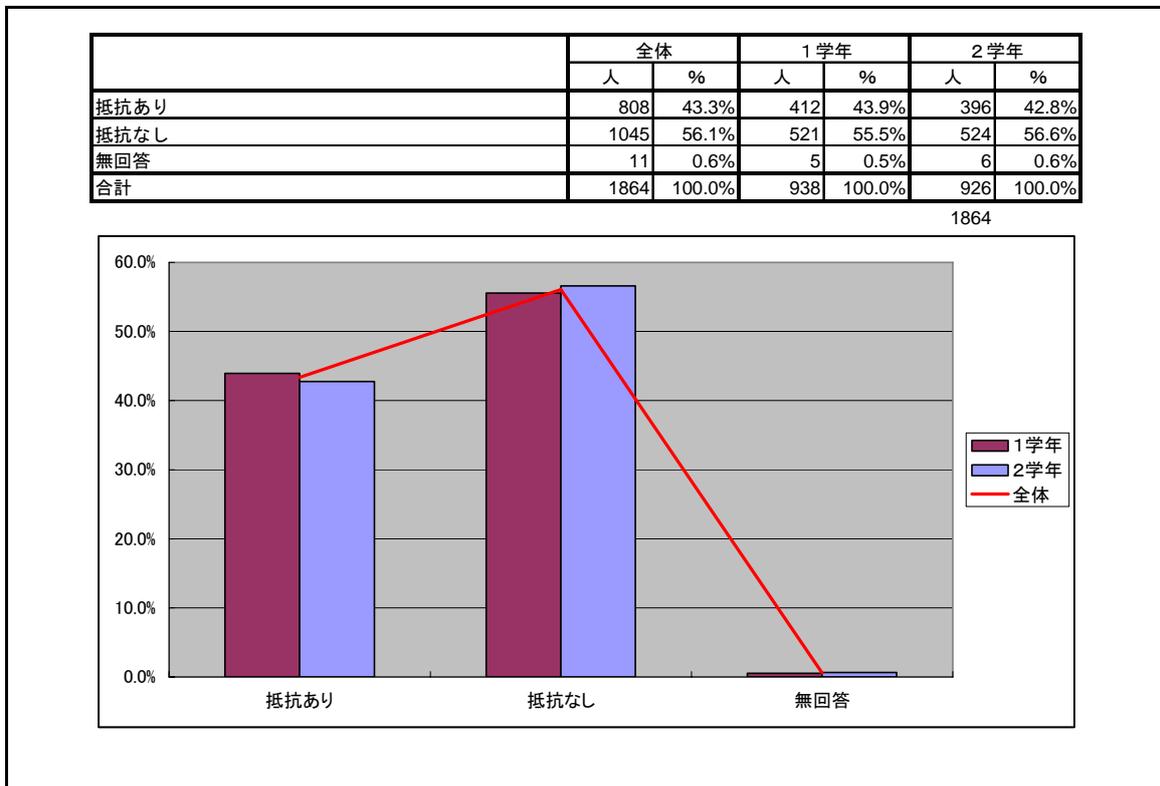


図4-c: 学科・コース別「問7、あなたは外国人と結婚することに心理的な抵抗がありますか」

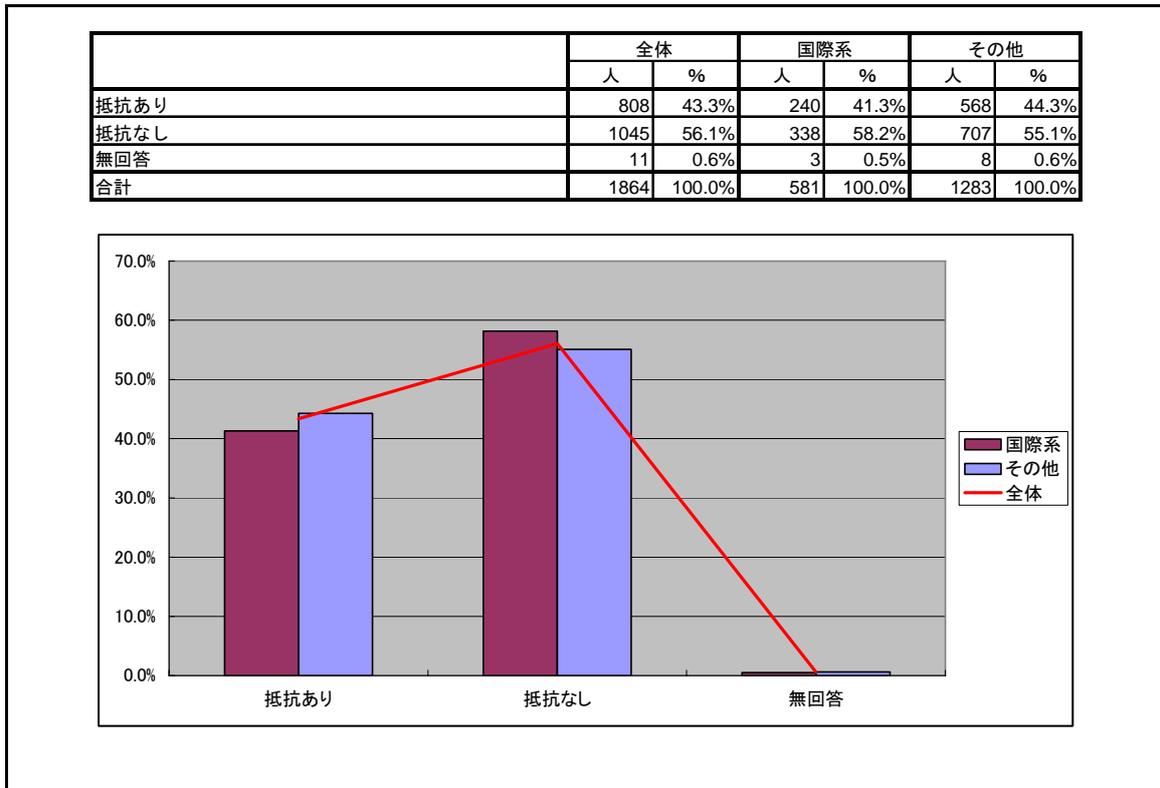


図4-d: 海外滞在経験別「問7、あなたは外国人と結婚することに心理的な抵抗がありますか」

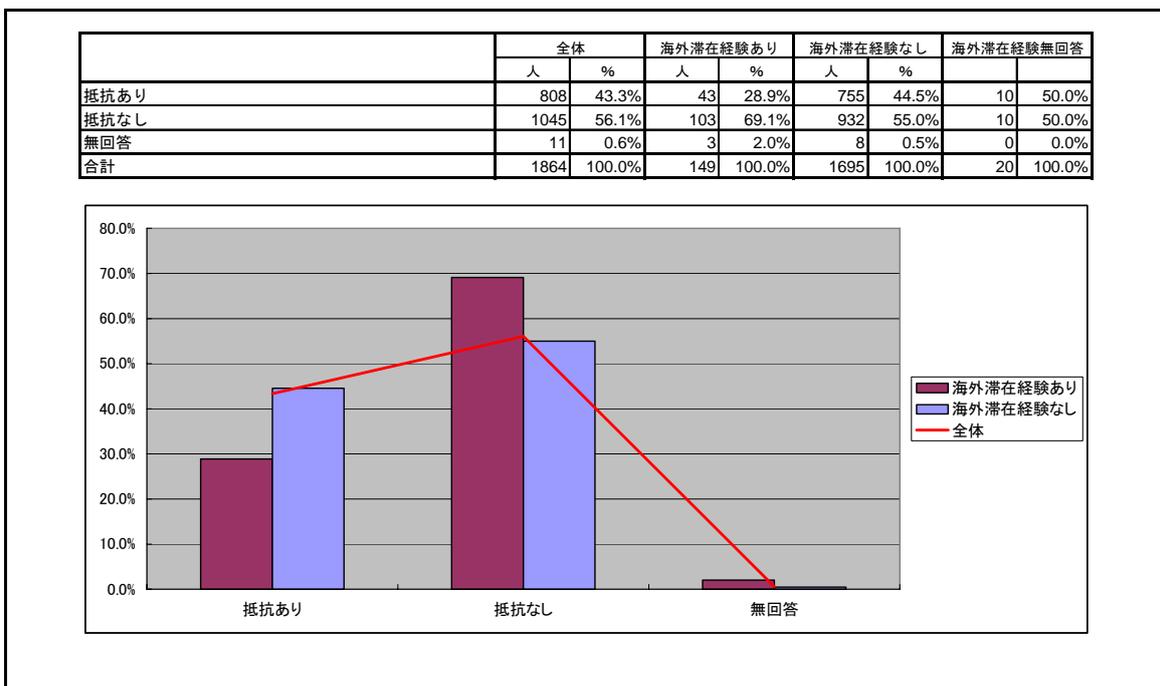


図4-e: 海外旅行経験別「問7、あなたは外国人と結婚することに心理的な抵抗がありますか」

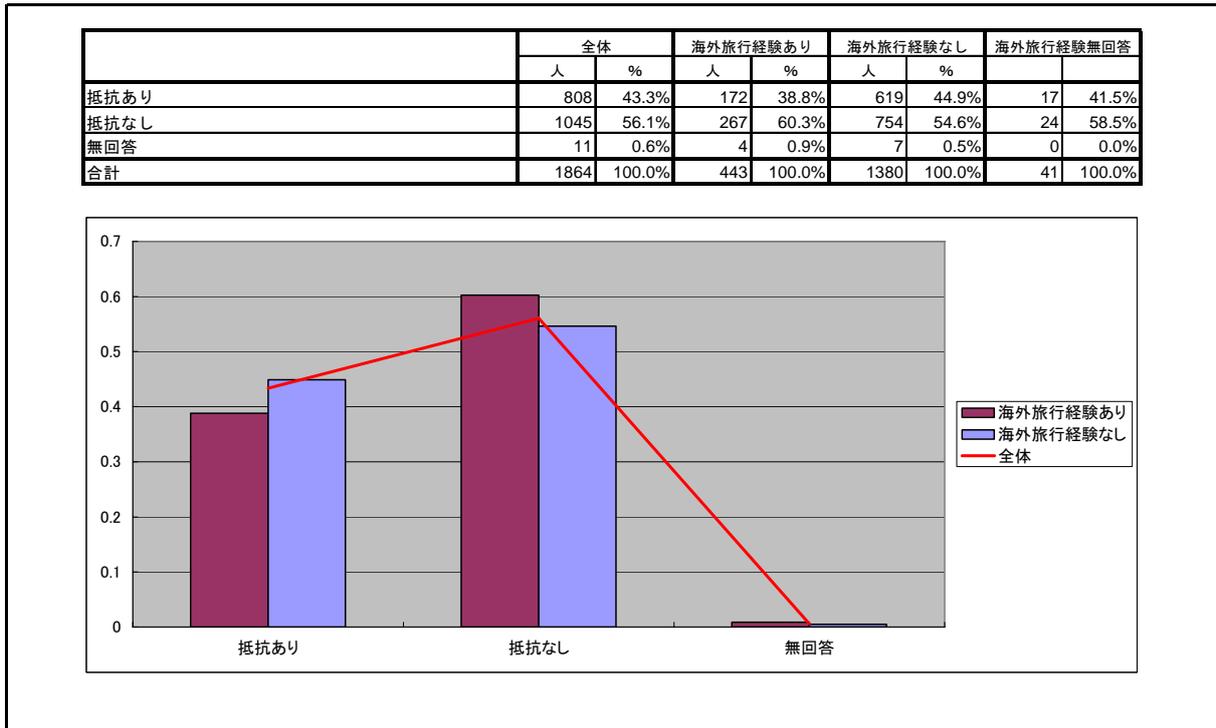


図5-a: 男女別「問8、あなたは今日の日本がまず、すべきことは何だと思えますか」

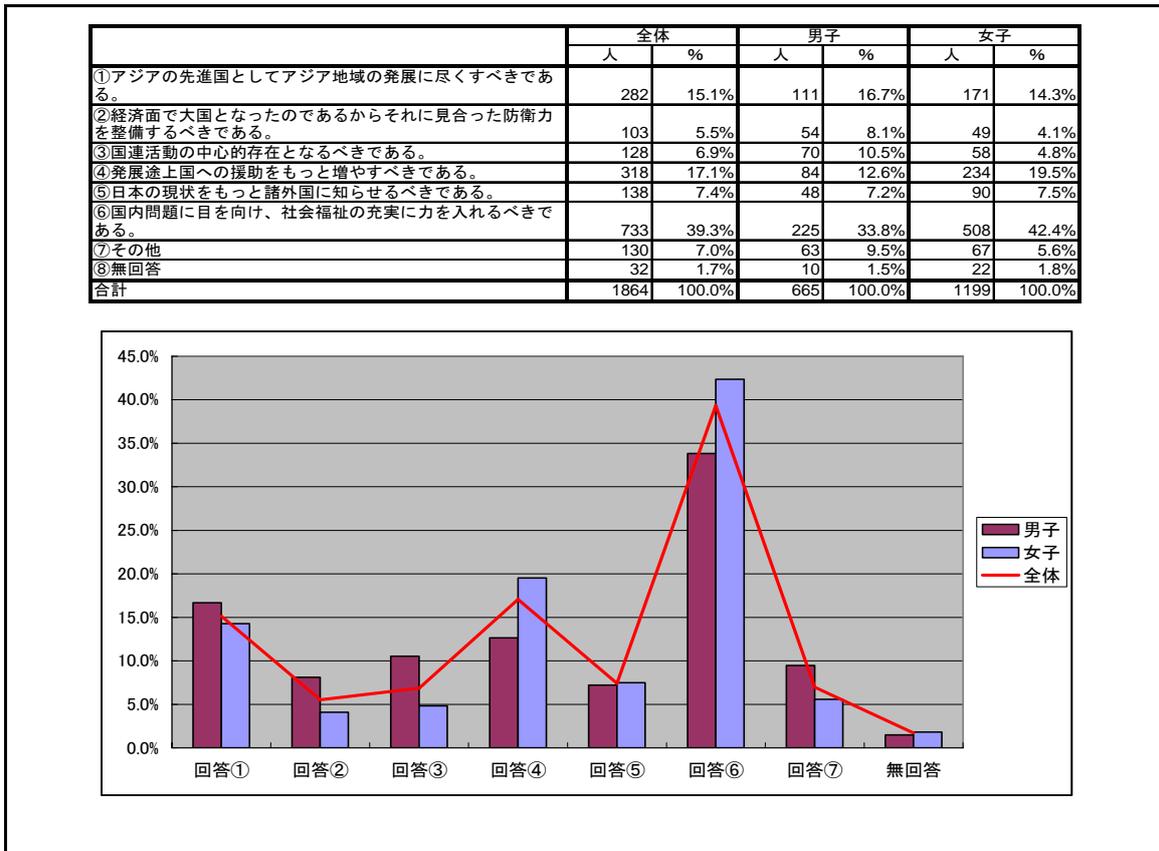


図5-b: 学年別「問8、あなたは今日の日本がまず、すべきことは何だと思えますか」

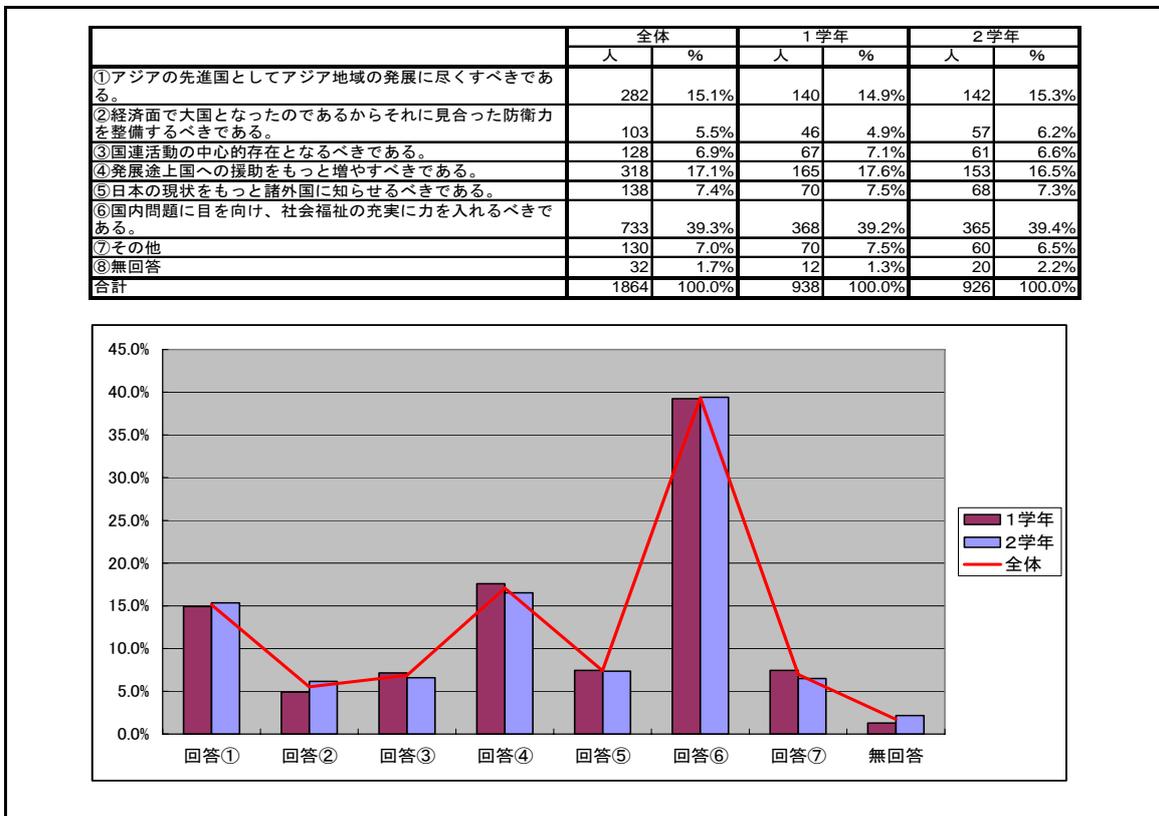


図5-c: 学科・コース別「問8、あなたは今日の日本がまず、すべきことは何だと思いますか」

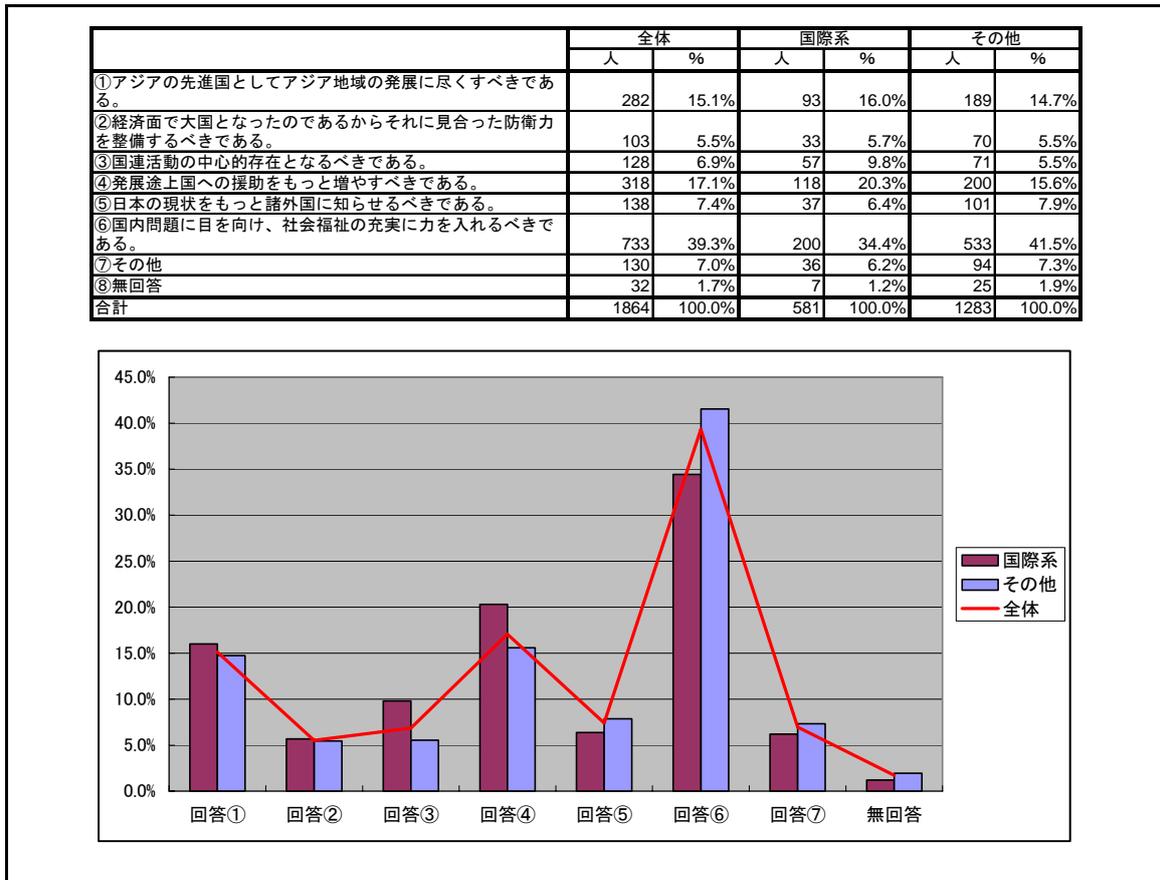


図5-d: 海外滞在経験別「問8、あなたは今日の日本がまず、すべきことは何だと思いますか」

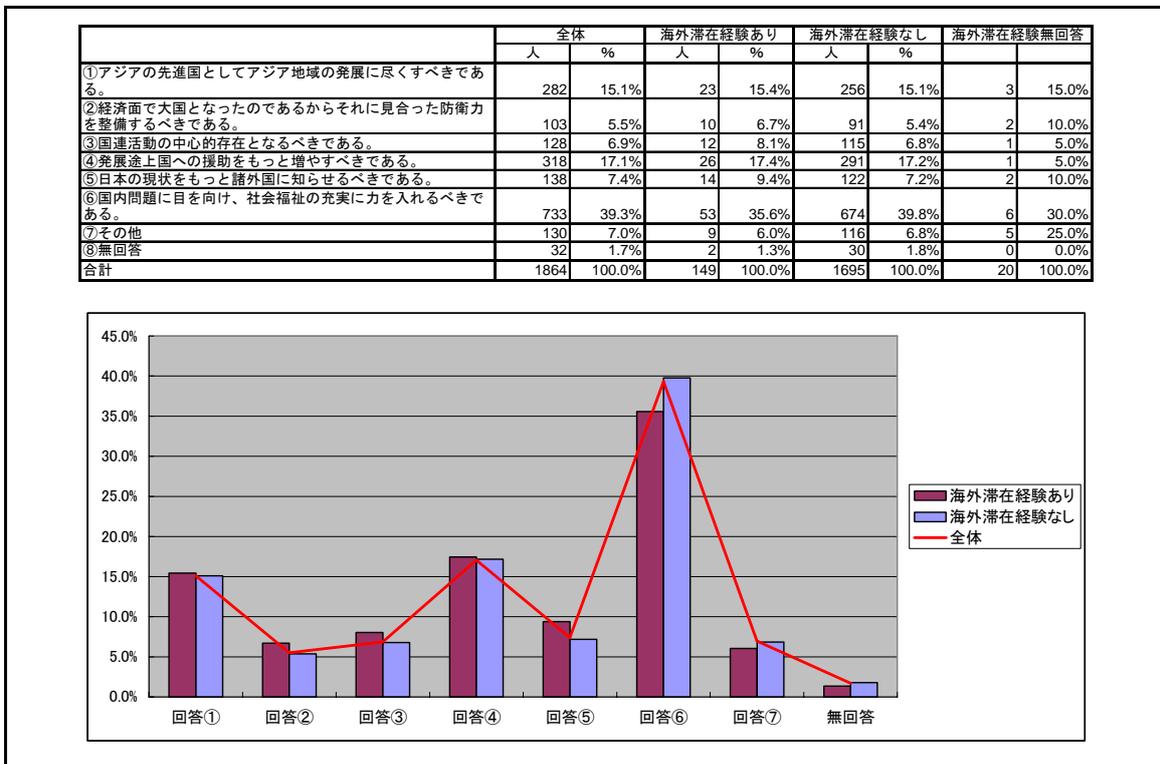


図5-e: 海外旅行経験別「問8、あなたは今日の日本がまず、すべきことは何だと思えますか」

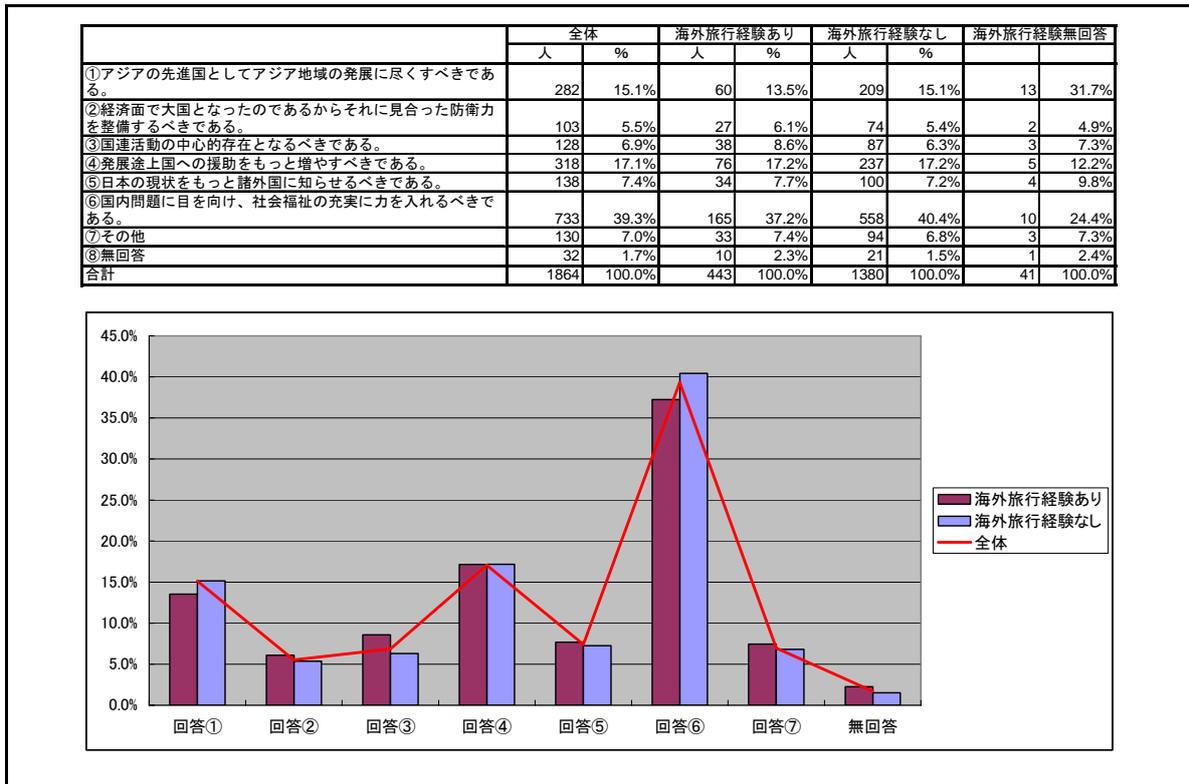


図6-a: 男女別「問9、あなたは日本が外国人の目にどのような国として映っていると思いますか」

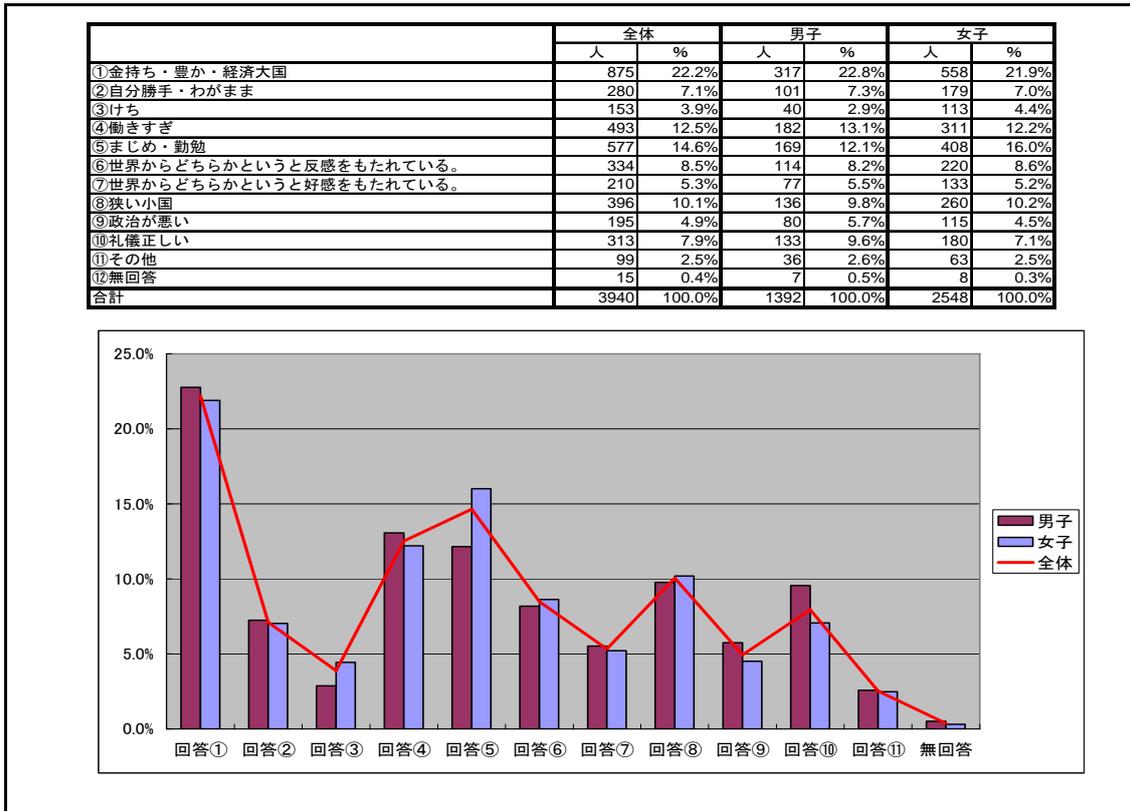


図6-b: 学年別「問9、あなたは日本が外国人の目にどのような国として映っていると思いますか」

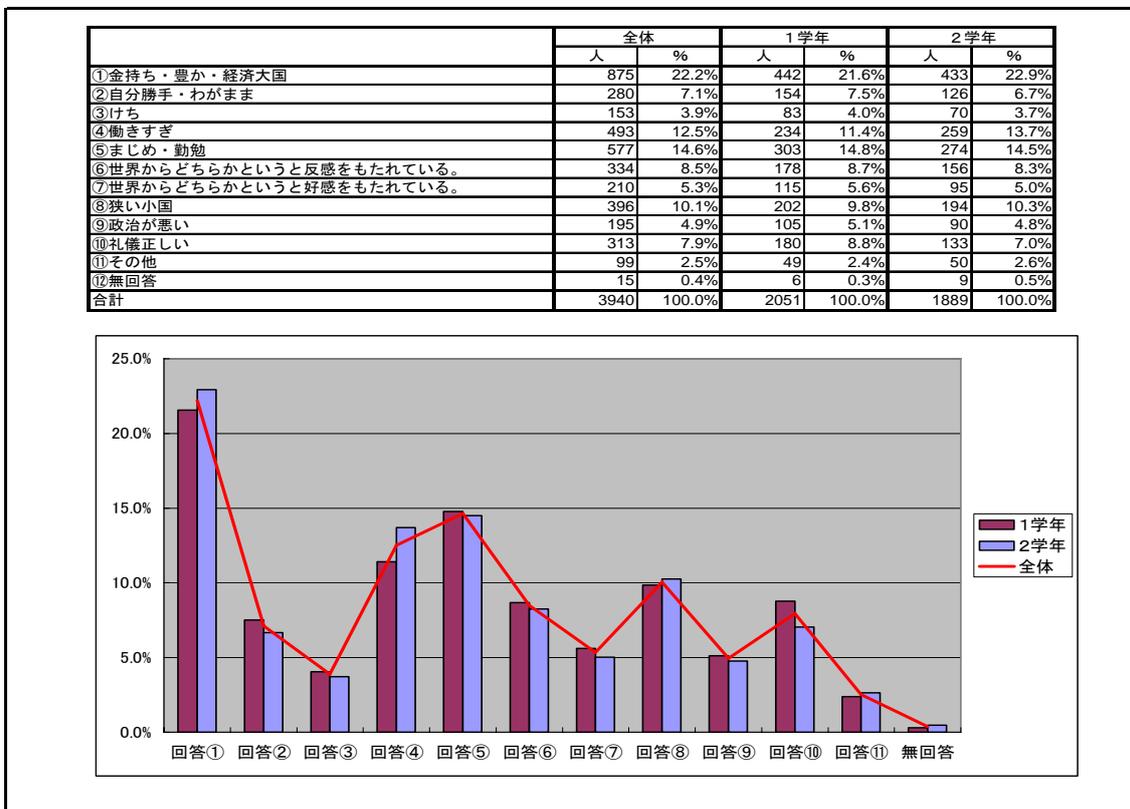


図6-c: 学科・コース別「問9、あなたは日本が外国人の目にどのような国として映っていると思いますか」

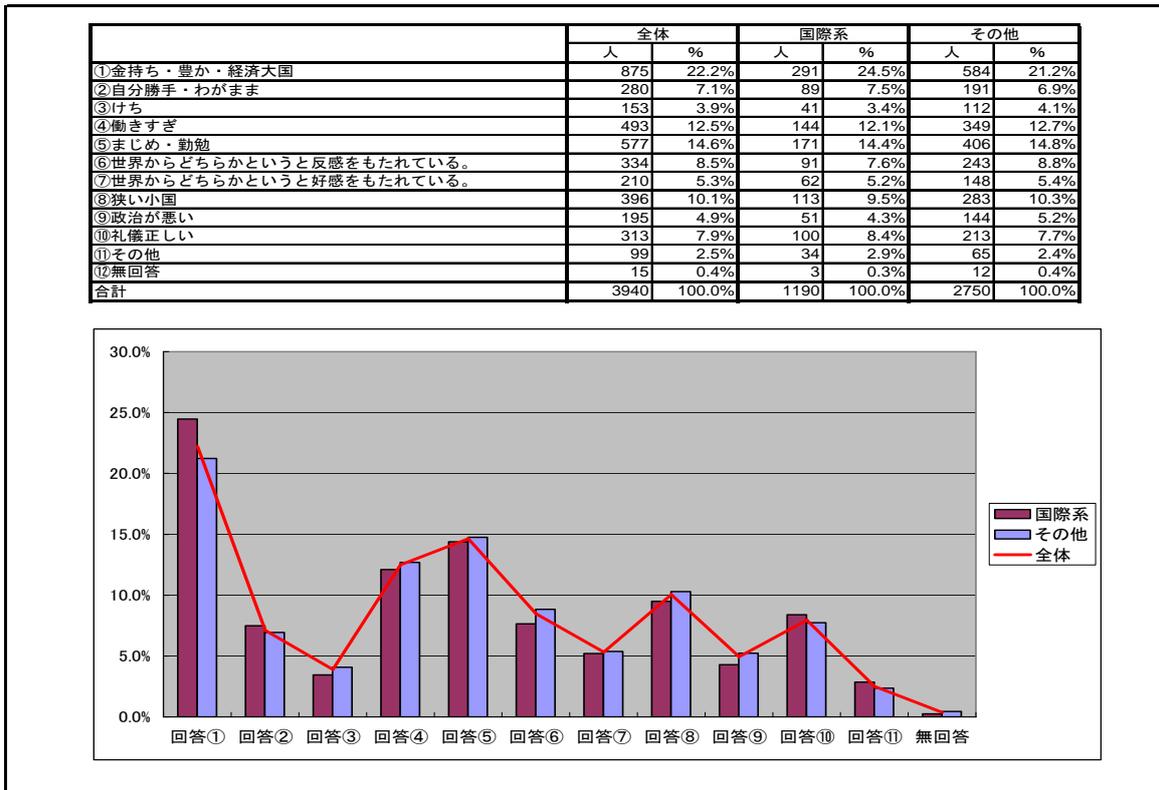


図6-d: 海外滞在経験別「問9、あなたは日本が外国人の目にどのような国として映っていると思いますか」

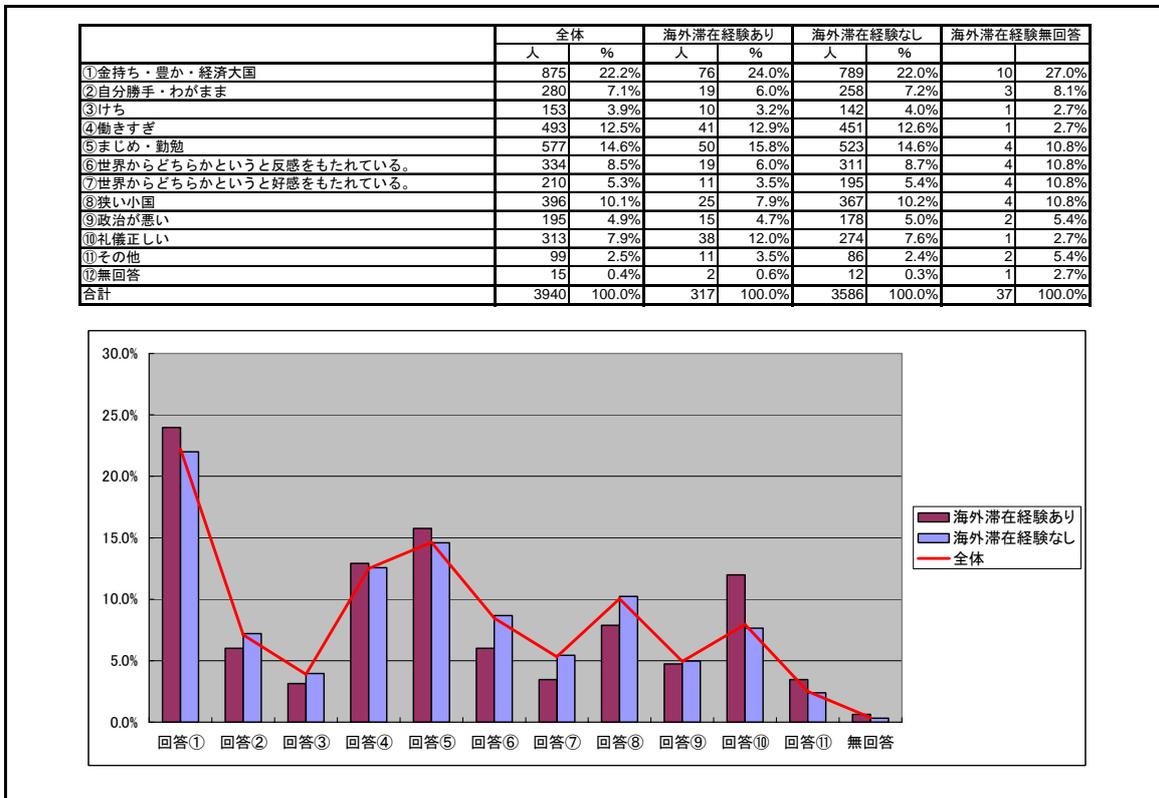


図6-e: 海外旅行経験別「問9、あなたは日本が外国人の目にどのような国として映っていると思いますか」

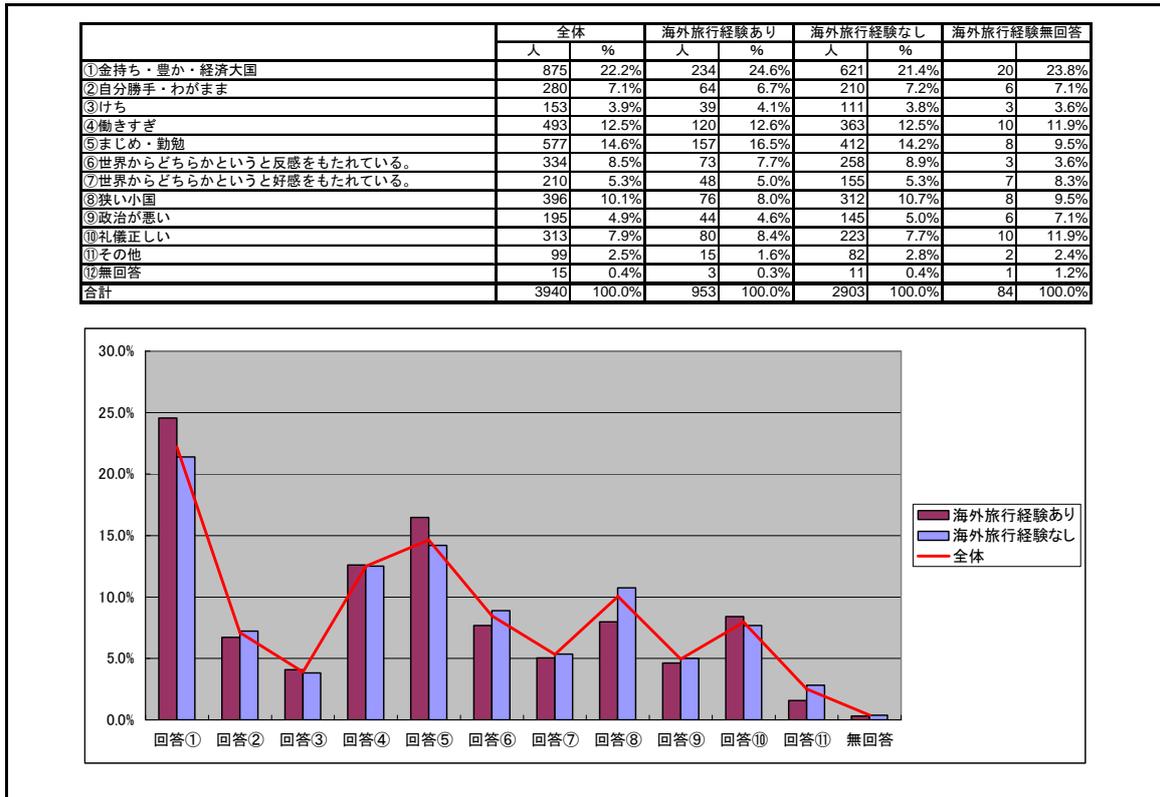


図7-a: 男女別「問 10、身近に国際化を感じる時はどのようなときですか」

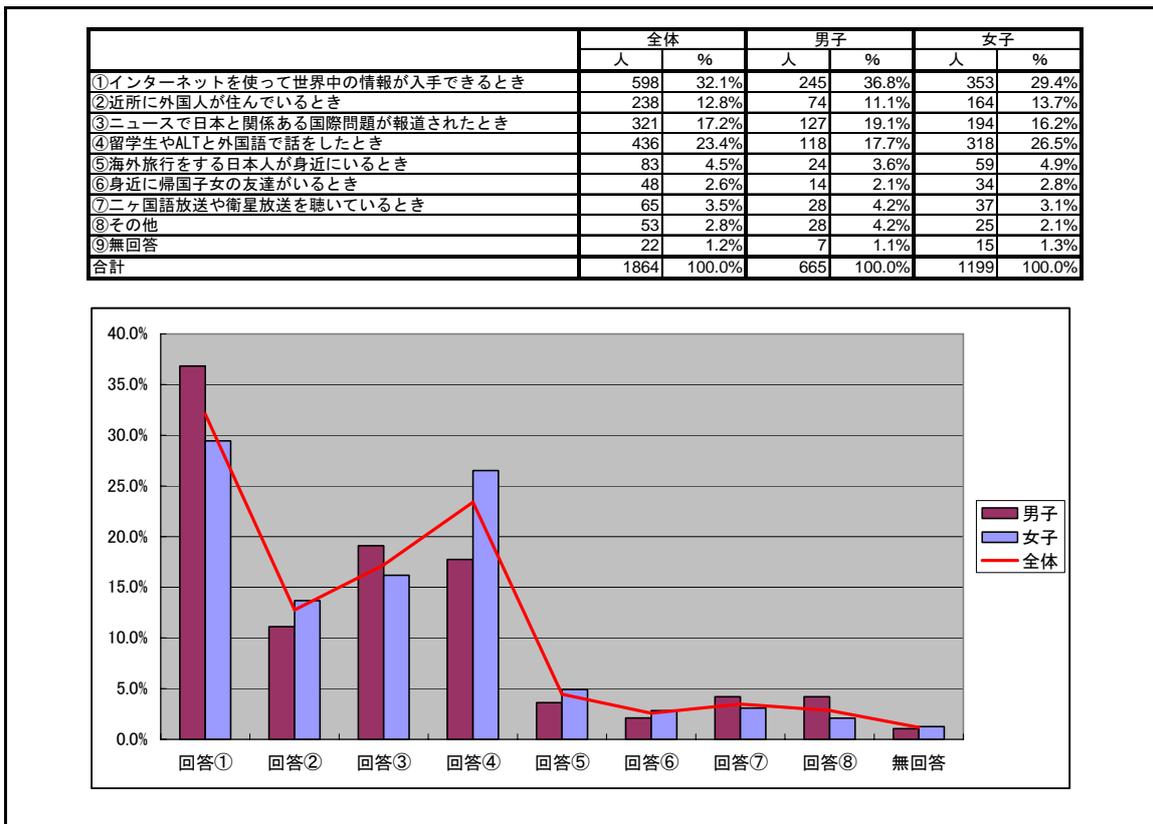


図7-b: 学年別「問 10、身近に国際化を感じる時はどのようなときですか」

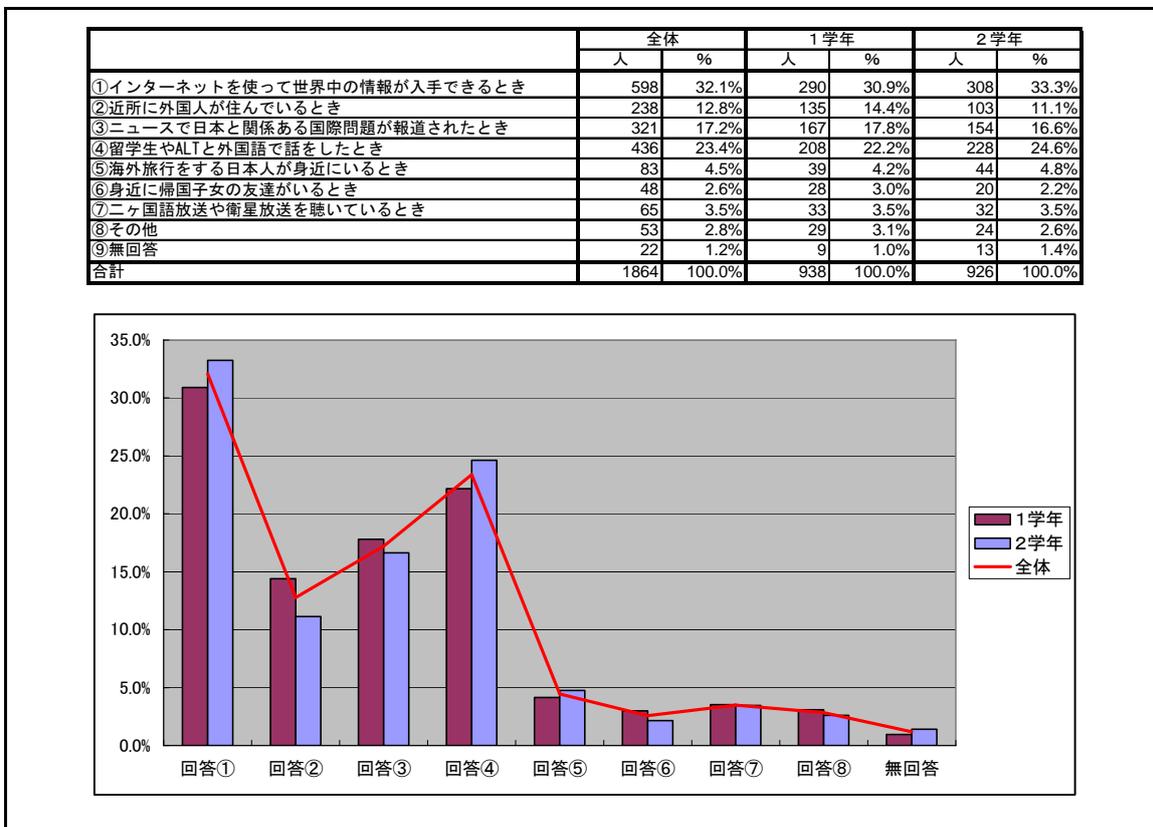


図7-c: 学科・コース別「問 10、身近に国際化を感じる時はどのようなときですか」

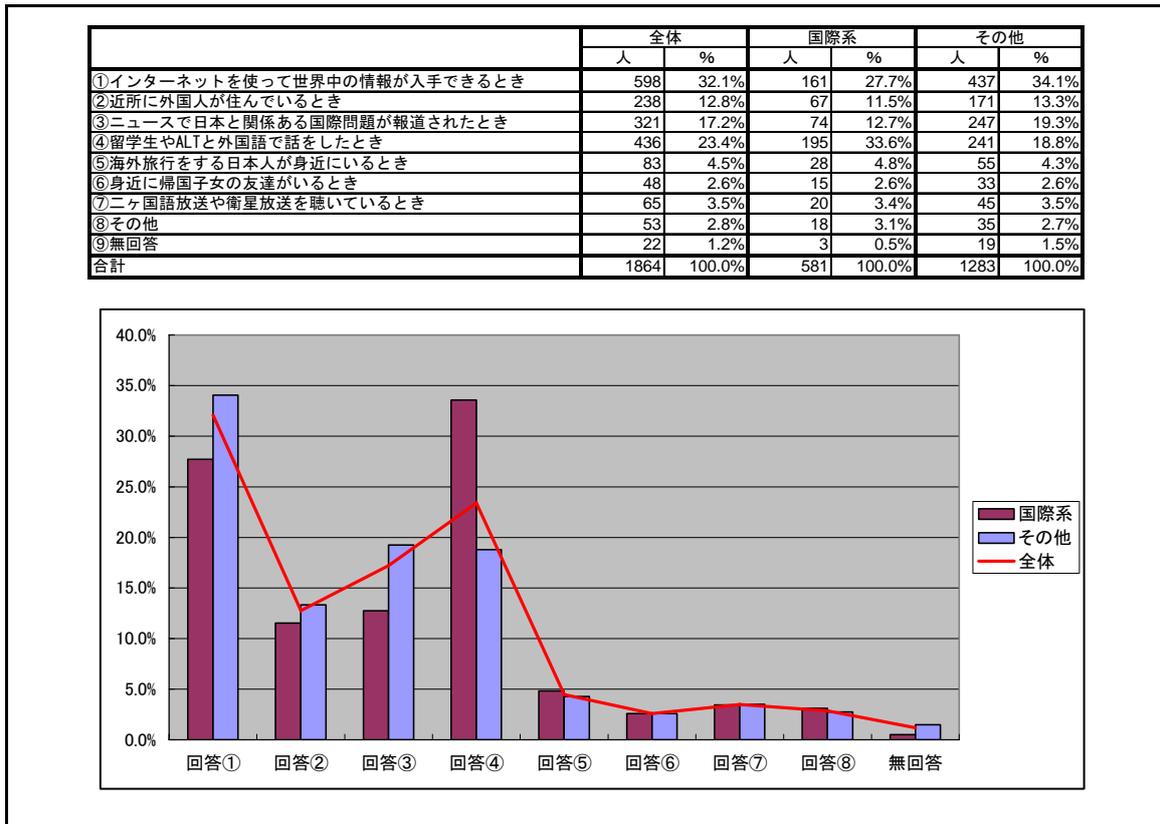


図7-d: 海外滞在経験別「問 10、身近に国際化を感じる時はどのようなときですか」

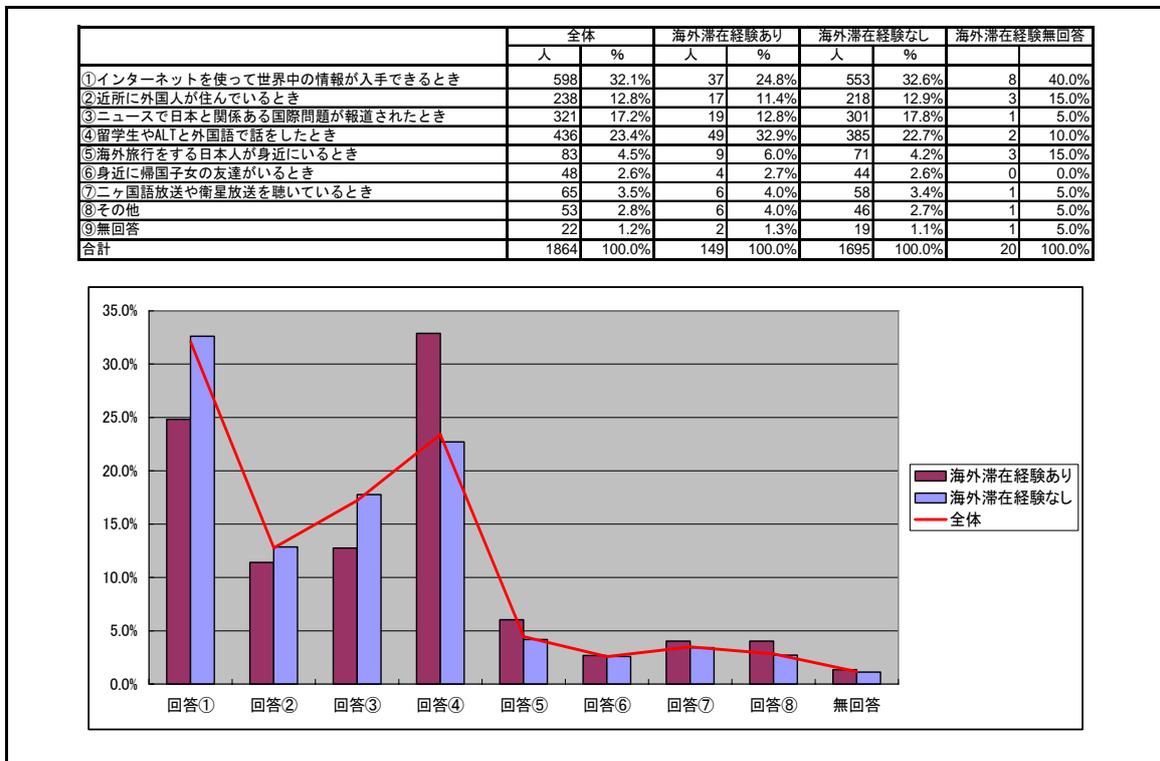


図7-e: 海外旅行経験別「問 10、身近に国際化を感じる時はどのようなときですか」

	全体		海外旅行経験あり		海外旅行経験なし		海外旅行経験無回答	
	人	%	人	%	人	%	人	%
①インターネットを使って世界中の情報が入手できるとき	598	32.1%	123	27.8%	457	33.1%	18	43.9%
②近所に外国人が住んでいるとき	238	12.8%	57	12.9%	176	12.8%	5	12.2%
③ニュースで日本と関係ある国際問題が報道されたとき	321	17.2%	84	19.0%	232	16.8%	5	12.2%
④留学生やALTと外国語で話したとき	436	23.4%	115	26.0%	314	22.8%	7	17.1%
⑤海外旅行をする日本人が身近にいるとき	83	4.5%	21	4.7%	62	4.5%	0	0.0%
⑥身近に帰国子女の友達がいるとき	48	2.6%	11	2.5%	36	2.6%	1	2.4%
⑦二ヶ国語放送や衛星放送を聴いているとき	65	3.5%	17	3.8%	45	3.3%	3	7.3%
⑧その他	53	2.8%	6	1.4%	45	3.3%	2	4.9%
⑨無回答	22	1.2%	9	2.0%	13	0.9%	0	0.0%
合計	1864	100.0%	443	100.0%	1380	100.0%	41	100.0%

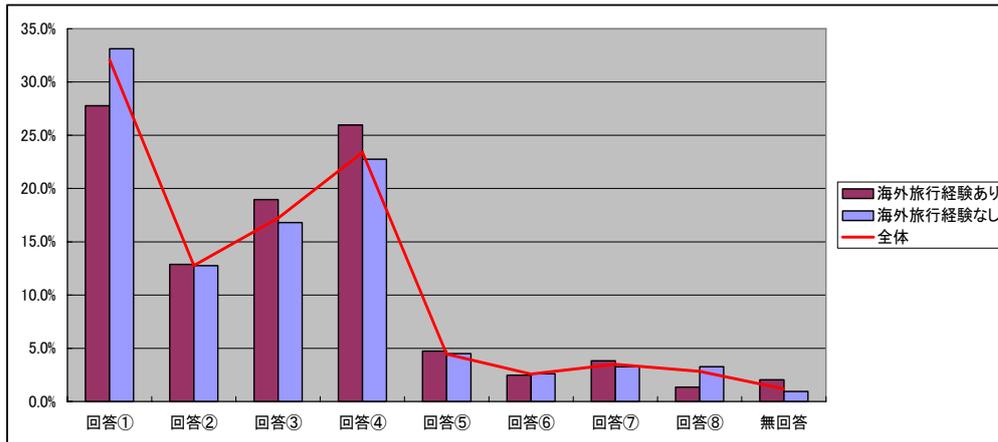


図8-a: 男女別「問 11、これからの国際理解に必要なものは何だと思いますか」

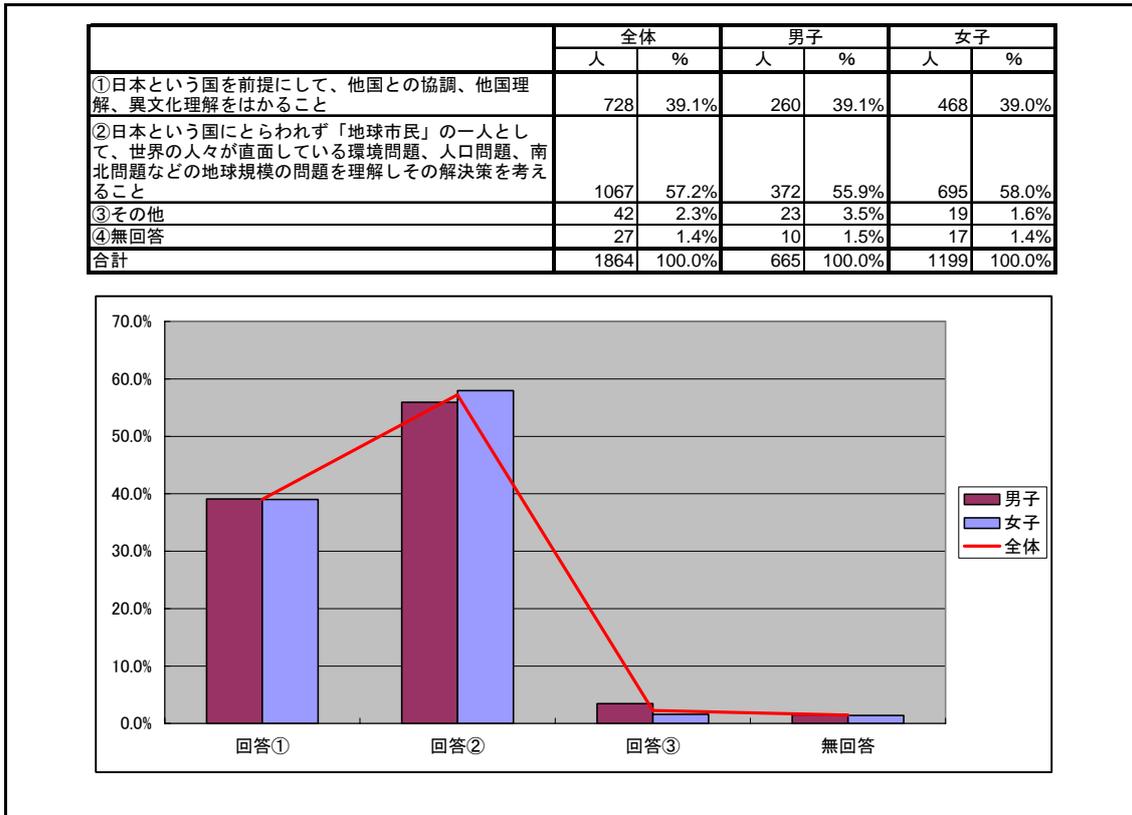


図8-b: 学年別「問 11、これからの国際理解に必要なものは何だと思いますか」

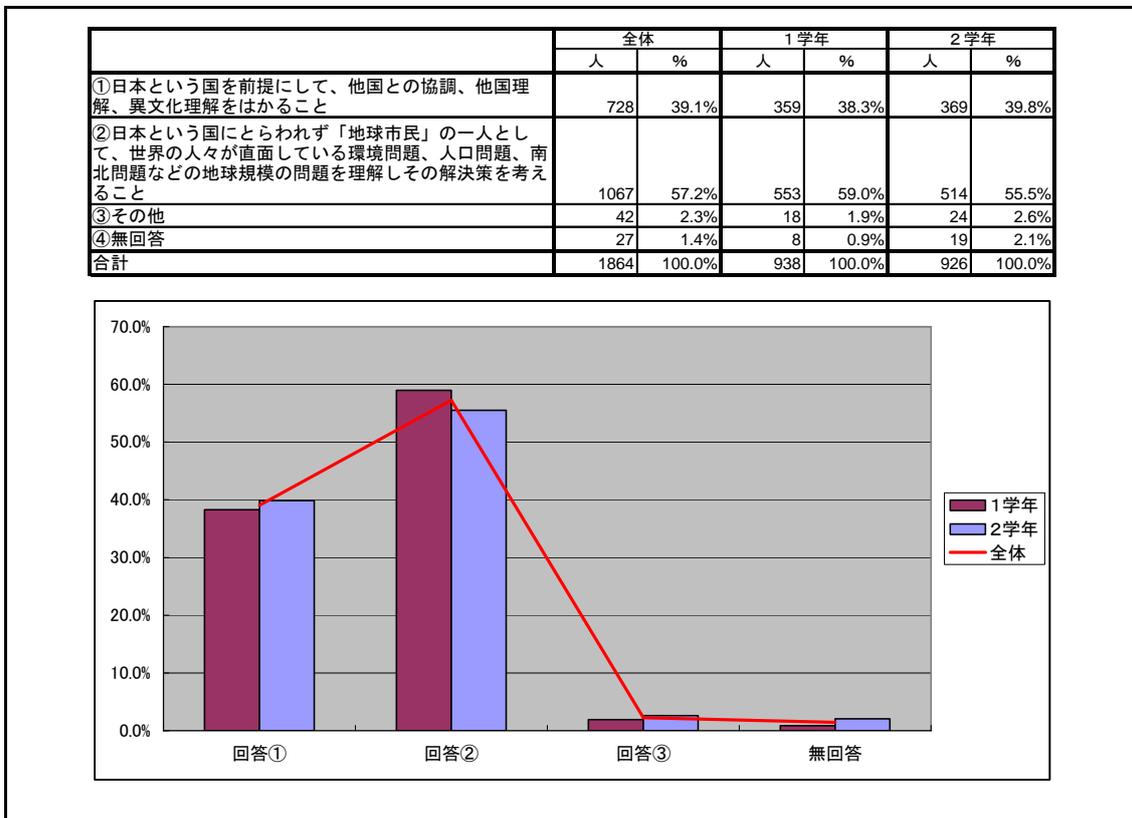


図8-c: 学科・コース別「問 11、これからの国際理解に必要なものは何だと思いますか」

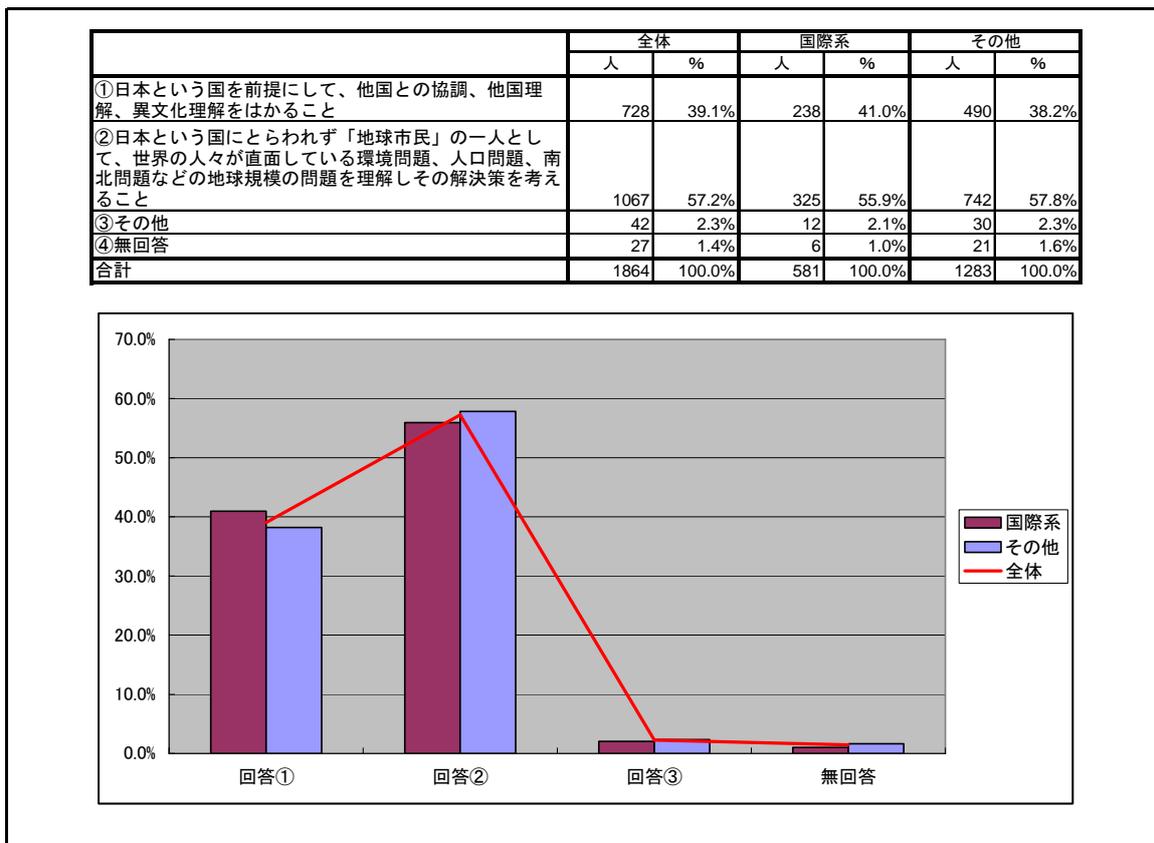


図8-d: 海外滞在経験別「問 11、これからの国際理解に必要なものは何だと思いますか」

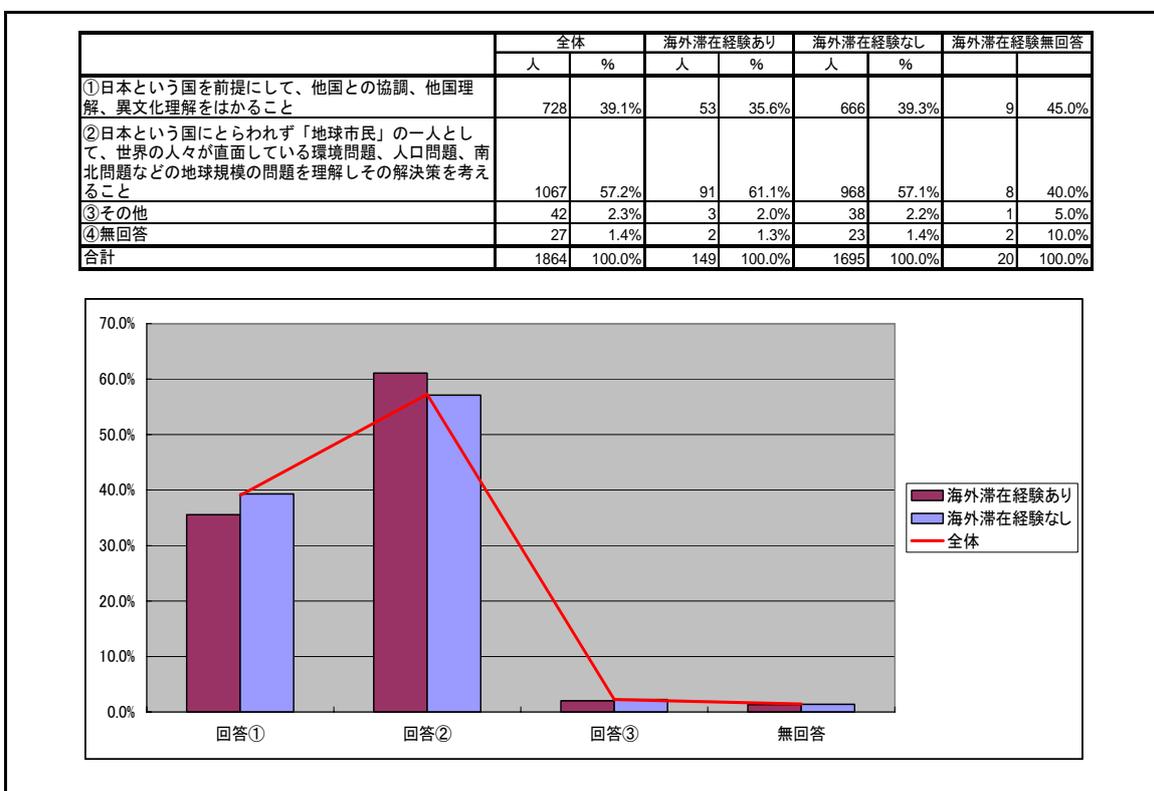
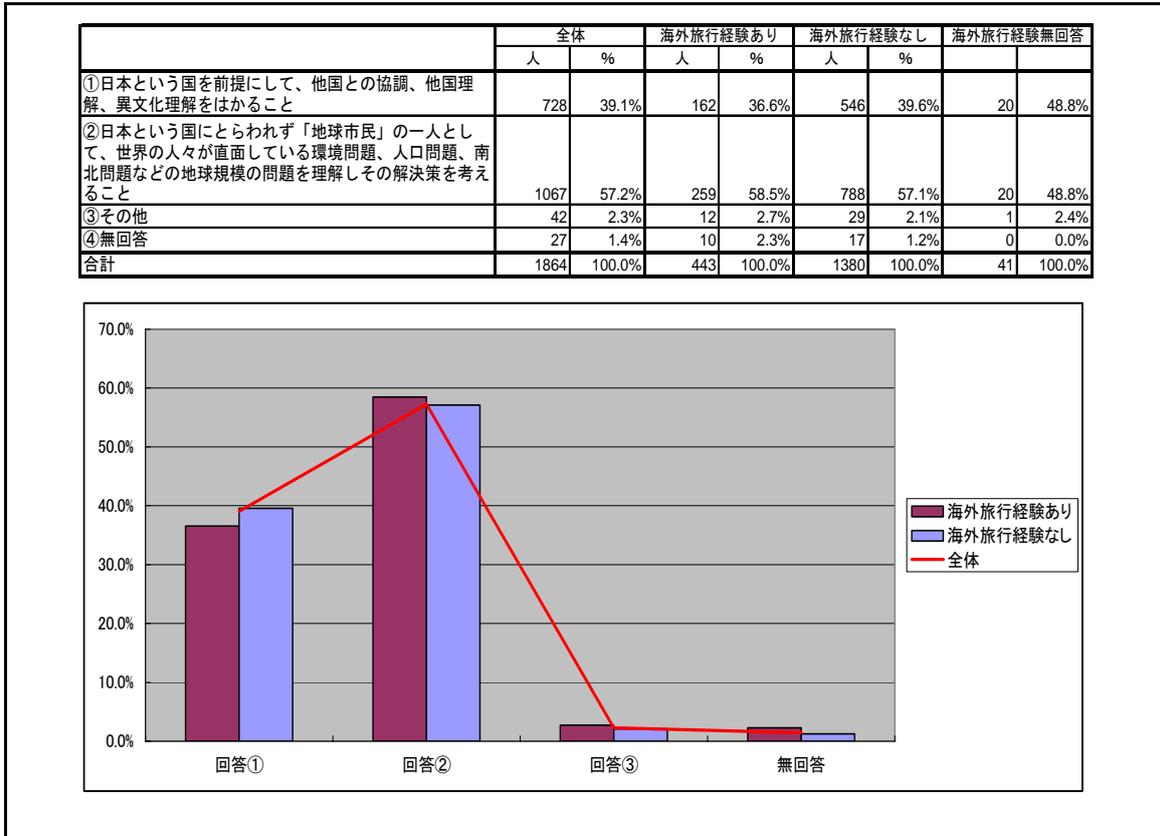


図8-e: 海外旅行経験別「問 11、これからの国際理解に必要なものは何だと思いますか」



参考文献

安達哲夫、佐藤悦夫、望月健一

2007 『国際理解教育のあり方に関する研究』2006年度富山県高等教育振興財団私立大学振興事業（研究活性化）助成金報告書

魚住忠久

1995 『グローバル教育：地球人・地球市民を育てる』 黎明書房

岡山県立総社南高等学校

1993 「国際理解についてのアンケート」『国際理解教育体系 第10巻：学校・地域社会などでの多様な活動』 pp191-203 教育出版センター

佐藤郡衛

2001 『国際理解教育：多文化共生社会の学校づくり』 明石書店

佐藤照雄

1993 「国際理解教育の歩み（展開史）」『国際理解教育体系 第1巻：国際理解教育の歩み』 pp.7-11 教育出版センター

東京都立国際高校

2006 『平成18年度 学校要覧』 東京都立国際高校

樋口信也

1995 『国際理解教育の課題』 教育開発研究所

東京都立国際高校ホームページ

<http://www.kokusai-h.metro.tokyo.jp/oyofes.htm>

<http://www.kokusai-h.metro.tokyo.jp/2006J8junior.htm>